

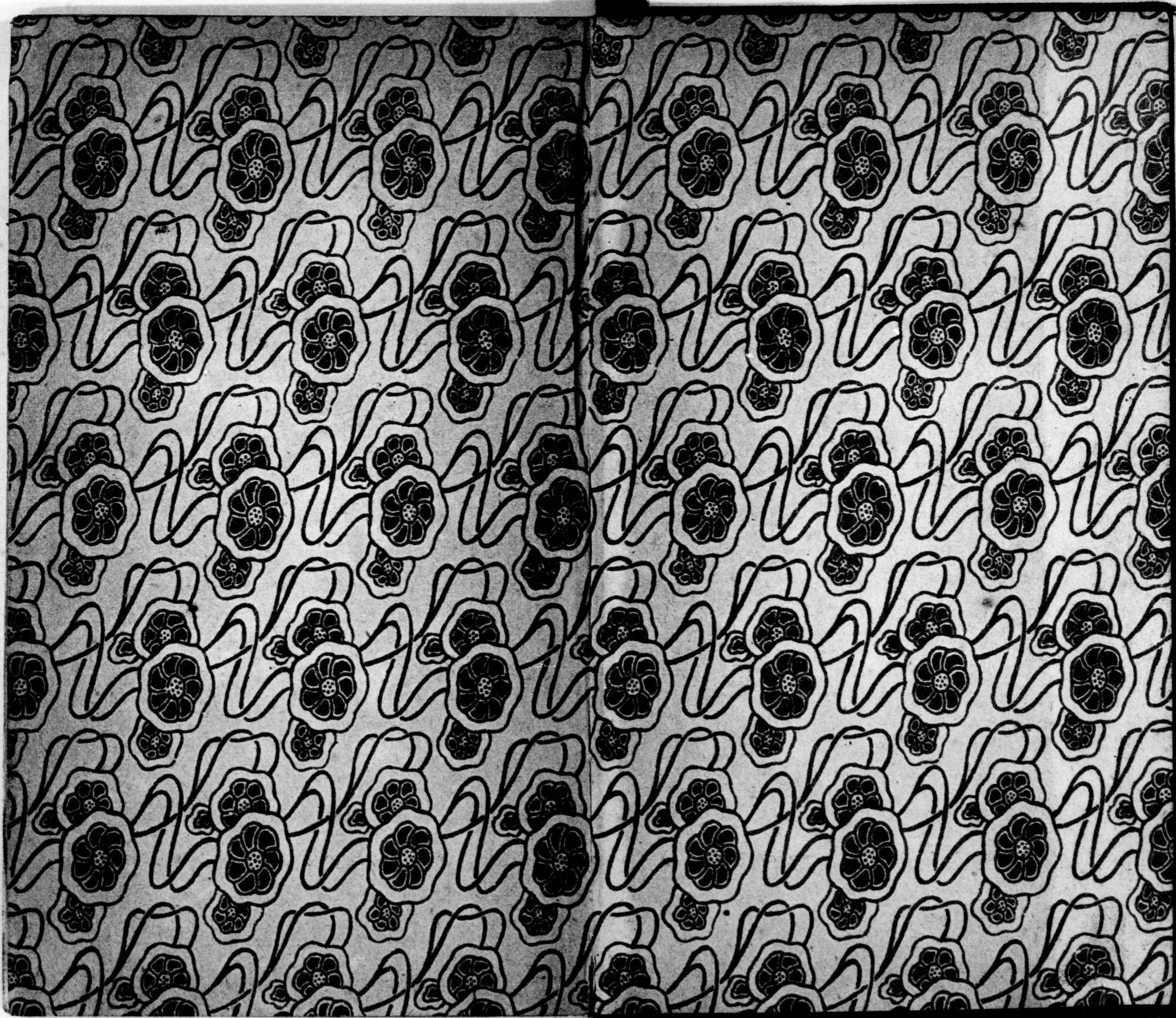
筆傳墨語  
僕が手紙



始









特100  
138

自叙

用ある毎にさら／＼と、筆呼び取りて書くが手紙の能なれども、其さら  
さらが、口に言ふべくして、容易く紙にのぼすべくもあらず。世に手紙  
文例の書少なからざれども、其多くは假りに事件設けての筆、故に往々  
形式のみに流れて、實際に應用さるゝものは少なし。つまり、用に臨む  
の準備として、常に習ひおくの料とするに過ぎざるなり。何れの點より  
見ても、手紙の六かしき事は論なし。故に、僕は之が例を示さんとはせ  
で、實際に贈答せし筆のそのまゝを、公刊する事にしたるにて、敢て手  
紙文例とは云はず。

多くの書は、自修として讀まするもの多きも、僕が此手紙は興味もて





讀まれん事を願ふにて、かへすくも文例とは云はず。筆の拙なりと云はん人は、或は夫れ手紙書くこと既に一人前以上の人なるべし。能く書きありと云ふは、或は夫れ未だ一人前にならざる人ならん。

詩歌之助など、自ら風流めきし名つけたれど、随分理窟もこぬる變屈人、論より證據、之を議論や教訓の部に徴さるべし。されど、興浮べば随分詩歌めきしものをも作りて喜ぶ。作は要なきまゝ省きたれど、之が虚ならぬ事は、風流遊覽の部にても知らるべし。又、是等の部分けは、便宜上したるにて、別に意見あると云ふに非ず。只讀者に問はまほしきは、手紙は六かしきと云ふ中にも、筆能く傳へ、墨能く語り居るや、の一事なりとす。

大正癸丑四月上院

詩歌之助識

筆傳 墨語 僕が手紙

細目次

議論……………一

○議論

教訓……………六一

小敘……………一

風流……………一九

美文書翰に就て答ふ

遊覽……………一九

第一 學友に……………二  
附來信

祝賀……………二七

第二 舍弟に……………六  
附來信

弔祭……………二七

第三 家妹……………三  
附來信

文範……………二九



第四 長文と短文との別……………一五

附返信

第五 一題長短文の二章……………一八

訴追見合せの忠告に答ふ……………五三

第六 美文風と實用的との別……………二二

附來信

友の剽竊論を駁す……………二五

○教訓

附來信

學友に旅行を勧む……………三六

小敍……………六一

附返信

青年會設立協議……………四一

附返信

附返信

我邦の山水と仁義との事を……………四五

感激と云ふ事の間に……………四四

筆に添へて弟に……………四八

友に與へて振はしむ……………六七

附返信

意志不堅固の友へ……………七二

碁を詩に代へよと勸告す……………八九

附返信

何か返事と乞ひし弟に……………七六

遊學希望の友を諭す……………九五

附來信

分際と云ふ事に就き……………七九

元日慶賀由來を答ふ……………九九

附返信

洋學を勧む……………八五

投機業に耽る友に……………一〇二

附返信

千里同風の四字につき……………八七

友に讀書を勧む……………一〇五

附來信

再び病氣の友に……………一〇九



附來信

名を濫りにする友に……………一三

附返信

○風流

小敝……………一九

友の我郷を問ひしに答ふ……………二〇

附來信

梅の頃遊學中の友に……………三一

附返信

觀梅に行かんとて……………三四

附返信

二月の頃轉宅を報ず……………三六

附返信

梅花を乞ふの書……………三七

附返信

梅見に招かれし返事……………三九

附來信

桃咲く小島の友へ……………四〇

附返信

春の旅に誘はれし返事……………四四

附來信

一寸其處の花見に……………四五

附返信

花の宴に招かれし返事……………四六

附來信

郊遊に誘ふ……………四七

附返信

春山に登るに誘ふ……………四九

附返信

郷友の信に答ふ……………五〇

附來信

舟遊に誘ふ……………五七

附返信

饞春の筵に招く……………五九

附返信

初夏の請に答ふ……………六〇

附來信

海村避暑の友へ……………六一

附返信

箕面觀瀑に誘はれし返事……………六七

附來信

初秋故郷の友へ……………六九

附返信



蟲贈られし禮……………一七四

附來信

月見に招く……………一七六

附返信

觀月の友へ返事……………一七七

附來信

菊花を乞ふ……………一七九

附返信

池田の友へ返事……………一八一

附來信

松茸贈られし禮……………一八四

附來信

蝸贈られし禮……………一八七

附來信

○遊覽

小紋……………一八九

返畿に遊ぶ友に……………一九〇

附返信

見た儘の大阪を……………一九四

四國巡する友に……………一九五

附返信

花の旅雅箋……………二〇九

第一信 圓山にて……………二一〇

第二信 鑛泉場にて……………二一二

第三信 清水にて……………二一四

第四信 嵐山にて……………二一七

第五信 大阪にて……………二二一

第六信 奈良にて……………二二三

武田尾温泉より……………二二六

笠置より……………二三一

三尾の秋尋ねて……………二三五

碓氷嶺の茶屋にて……………二三九

寒霞溪より附十二景……………二四一

第一 通天窓……………二四二

第二 紅雲亭……………二四二

第三 錦屏風……………二四三

第四 老杉洞……………二四四

第五 蟾蜍巖……………二四五

第六 玉笏峰……………二四五

第七 畫帖石……………二四六

第八 層雲壇……………二四六

第九 荷葉岳……………二四七

第十 帽子岩……………二四八



第十一 女蘿石……………二四八  
 第十二 四望頂……………二四九  
 妙義町にて……………二五一

附來信

歸宅を祝ふ……………二七七

附返信

醫術開業を祝す……………二七六

附返信

大學止めし友に……………二七九

附返信

出産を賀す……………二八一

附返信

婚姻を賀す……………二八二

就職を祝す……………二八三

○祝賀

小紋……………二七一  
 辯護士開業を祝す……………二七二  
 附返信  
 轉居を祝す……………二七五  
 附返信  
 新宅祝はれし返事……………二七六

五十を賀す……………二八四  
 全快を賀す……………二八五  
 附返信

○弔祭

小紋……………二八七  
 逝ける學友の父に……………二八八  
 父喪ひし友を慰む……………二八九  
 兄喪へる人に……………二九一

○文範

小紋……………二九三  
 汪思郷が師友を求むるに答ふ……………二九四  
 門人に示す……………二九五  
 饒者に答ふ……………二九五  
 友人に自修を勸む……………二九六  
 子の貧を厭ふを戒しむ……………二九七  
 沈太史に功を立てんこと  
 を勉めしむ……………二九七  
 途中に別を悵む……………二九九  
 秋夜に請じて會飲す……………二九九  
 秋懷……………三〇〇



人の浙江に之くを送る……………三〇一  
 謝中書が山川を美するに答ふ……………三〇二  
 吳に遊ぶを送る……………三〇二  
 金體吾が五句を壽す……………三〇三  
 友人の女を得しを賀す……………三〇四  
 屋を創むるを慶す……………三〇五  
 友を哭す……………三〇六

上欄目次

葉書通信

近畿だより……………一  
 東海だより……………六一  
 東山だより……………一四五  
 北陸だより……………一九五  
 中國だより……………二二三  
 四國だより……………二六六  
 九州だより……………二八六

目次終

葉書通信

近畿だより

大阪見物し

て一筆

水の都と聞きし大阪  
 今は鐵道の大都會、  
 飛脚めきし旅には至  
 極便利にござ候。今  
 し梅田驛の茶屋にて  
 一やすみ、處々へ見  
 物として出掛くる筈

近畿だより

墨筆傳僕が手紙

○議論

議論と云へば、極めて堅苦しう聞えもしやうが、説明解  
 釋なご、云うと、少しは優しう聞ゆるであらう。此には  
 議論の筆が、つた性質の物を載する事にした。忠告の如  
 き、時に或は議論に傾いたものも無いではないが、是は  
 教訓の部に屬せしめた。祝文の如きも、議論のものないで

○議論

詩歌之助著



安着の御報かたが  
た右迄。草々。

中の島にて

迷ひもせずして來し  
が中の島、櫻もほつ  
／＼咲き居り、旅愁  
を慰むるに足り申し  
候。最も目につきし  
は圖書館、日本銀行  
さてはホテル、田舎  
者に宏壯なる建物  
は柄に合はぬと見  
て驚くが癖にて候。

は無いが、是は亦祝賀の中に屬せしめた。すべて斯う云  
ふ風な類別立てたのは、全く僕が勝手なので、此文は何  
の部、此文は何の部に相當と思ひ、其部／＼に屬せしめ  
たのであります。卷首に執りし筆の序に、此事を一言辨  
じて置く。

美文風の書翰に就て答ふ

第一 學友に

◎來信に曰く。學兄頗る美文風の書翰に熱中なされ居  
り、何事にも然かく筆執らるゝ様に存じ候處、深き御

○  
豊國神社も美事に之  
れ有り、軍馬の銅像  
に並びて木村長門守  
の碑、南北に架るは  
難波橋、水は兩方に  
燕尾に分れ、一寸詩  
に成りさうな地にご  
さ候。上手に見ゆる  
が天神橋、その上に  
は天満橋遙かに見  
居り候。

滔々として流るゝ淀

近畿だより

所存ありての儀に候や、先以て伺ひ上げたく候。小生  
も固より、千里の遠きに別れ居ても、面談すると同じ  
く感ずるは、美文風ならずばと信ずるものに候も、只  
譯もなう好めるのみにて、深く弟等に問はれては、一  
寸返答に困ること多く候處、御筆の序に、御得意の議  
論承り度候。敬具。

君こそ美的書翰に御熱心、その證據には今日の御書にも  
知られ、議論聞かせよとは、少々閉口の至りに候。僕と  
て譯もなう筆執り居り候へども、大體は心得居る積りに  
之れ有り、又手紙文に改良加へんとする抱負をも御座候  
精しうは追々聞え上げ申すべく、先づ一言二言左に

○ 議 論



近畿だより

川 兩岸は少し埋立てられて、舊よりは川幅狭く、眺めは新しき心地せられ候。此處にて一番よきは城を眺むる事に之れ有り、青松の表には粉壁明かに、折柄花曇、ぼかし出されし繪のやうに、極めてよき景色にござ候。只歎すべきは、豊臣氏の霸業、一時の夢なりし事にて候。

櫻の宮にて

俗に申しても大阪にては唯一の花の名所造幣局の櫻眺めて訪ひ申し候。雑沓言ふばかりなく候。歸路には、大長寺訪はんとして移轉やりに驚き、大阪城を見に参る處に御座候。藤田の新男爵、寺を移し鯉塚や小春治平の墓まで我有とやられ

近畿だより

○ 議 論

四

北に歸る雁や南に征く雁に托し、春秋の思ひを寄する手紙文、古來其書に乏しからず候も、只その優美にして詩趣に富みたるものは少なく候、是れ僕が美文風を慕ふ第一理由とも申すべく、又鼓吹せんと欲する次第に候。世に稱する所の手紙たる、單に坐して俗事を辨ずるに足れりとするは、取るに足らず、大に悪しく候。見給へや。花に對しては情や艶麗に、月に對しては神や清新に、山水に對しては興や秀逸に、古蹟に對しては感や激越に、出ても尙吾人に必要なは手紙に之れ有るに候はずや。手紙は、俗事を辨ずるの最良機關とすれば又風流韻事を傳ふる最良機關に供して宜しかるべく、而

も一片の書牘、千歳に遺るべく候。

又見給へや。交通機關の整頓したる今日、手紙の力を借る事益多く、數百里相隔つるも其人の信は直に接し得らるゝに候。是まで、門外に一步を致さざりし人、名所古蹟探尋の旅行催す世と相成り、學生には修學旅行など頻りに行はるゝに候はずや。所謂美文風の書翰は、是等の旅に必要にして、此筆に乏しき人々は、僕より見れば口なきも同然と存じ候。而も美的の筆は、其景なり其情を巧妙に描寫し、實際よりも以上に人の胸裡に響かせ得るものに御座候。此處ぞ、すべての文章の徳、口と雖も繪と雖も寫真と雖も、決して及ばぬ長所に候。

○ 議 論

五



近畿だより

しかき存じ候。御威光恐入り候。

城門の前に

て一筆

同じ田舎者にてても道者は城を何げなく見申すべく、僕は詩の片端解すればか、感慨深く、ごうかするさ、豊公の末路を悲しう思はれ申すに候が、豊公は地下にて却つて笑はれ居る事

〇議 論

六

申せば限りなき事、以上聞え上げし一々、僕が美文風の書翰に心寄する事も、實際それが必要なる事も、世に斯種の手紙を鼓吹せんとする事も、略御合點まゐりたるべく、委細にわたりては、重ねて筆執り申すべく、吳々も御玩味願はしく候。尙々、手紙は兎に角も感情を交換するの具、文字以外に幾多の含蓄を貴ぶに候。含蓄は人に感動を與ふる靈力を有し居り、詩趣は最も其靈力を有するものに御座候。含蓄と詩趣とは、相伴うて離るべからざるものと申す事も、忘れてはならず候。草々。

第二 舍弟に

に候はん。今日は、兵營の番兵も、眠げ催すべき日に御座候

天王寺にて

又一筆

先刻より塔に迎へられしは、此處のお寺大阪隨一の精舎、五重塔と大釣鐘は名高く、鐘は明治三十二年頃の新鑄にござ候。彼の聖徳太子の創建し給ひしもの

近畿だより

〇議 論

七

◎來信に曰く。何も彼も後れがちの田舎、美文體の手紙が、此頃漸う流行して参りました。東京の文學講義録などにも、此文の作法が出て居るさうです。兄上様には、先年より御研究と聞きました。美文體と云ふ事の三字、只一口二口で判るやうな、御返答が欲うござります。何卒願ひます。お尋ね、能く判りました。美文と云ふ事は、みやびやかなる語句を用ゐて、麗しくかざり綴られた文章と心得たらよい。體とは、俗に云ふさま、語を代へて云うと風と同じ事になります。即ち美文體の書翰とは、美文見たやうな手紙と申す事で、雅語を使はねばならぬ、優美に書



境内は勝蹟多く、今し花多く咲き、茶店など數知らず、市内の心地致すに候。斯く繁華になりしは、近年この噂に候。

八軒家の旅

宿より

初旅者の宿屋まごつき、巡りく、天神橋目當に來、終に此處なる八軒家に宿り申し候。八軒さは往

かねばならぬ。結局、詩趣を土臺とせねばなりません。雅語と云ひ、優美と云ひ、詩趣と云うたどて、支那風の尺牘體でもない。又和文風の消息體でもない。近頃に創められた、一種の手紙と悟つたがよい。併し、尺牘體も消息體も、皆應用せらるゝ場合多く、又應用してよい事も知つて居らねばなりません。

美文體の手紙は、主に情と景とが命である。故に情景を巧妙に叙ぶる事の稽古をせねばならぬ。精しう云うと却て判るまいから、實際のお話をしやう。先づ情の叙べやうから。

懐かしいと云ふ事は

昔の事、今は京橋と名さへ優しく、一丁目より三丁目まで有るこの事。電車も通ひ居り、北へ三四町には、例の天満宮ござ候。夕暮に參詣終へ候。

大阪にて繁昌するは電車に候も、道頓堀の芝居は下火と相成り、ごこも彼處も活動寫眞の大流行、恐

近畿だより

又しても世は春と相成り、花笑ひ鳥歌ひ、去年に變らず候も、共に野遊せる君は東京へ御遊學……待ちし暑中休暇には歸省し給はず、此頃は如何にと御消息待つ間に、村には早く秋風吹き初め、書齋に君懐ふ夕には、蟲さへ可笑しう語り出で……

樂しいと云ふ事は  
此處、溪村も彌直打出で、三伏の此頃も暑さ知り申さず候て、松の小琴、瀧の鼓、興いと多く候。……  
住めば都と申す喩、淋しき山村の冬も面白く、方三尺の圍爐裡の縁、吾々の小天地に御座候。……  
其他悲しいと云ふ事も、雄壯と云ふ事も、皆道具を使は

○議 論



ろしき程にござ候。流行は一時なりと存じ候も、活動寫眞ばかりは妙に長く繼續致す由。研究せば面白き事に候はん。是は固より時勢の上よりにて候。

梅田驛にて

只今、京都へ向ひ申し候。一時間餘を過ぎば、東寺の塔に迎へられ申すべく、筆

ねばならぬ。殊に抒情には道具が必要で、懐かしいを懐かしいと云はず、楽しいを楽しいと云はず、其事を文字に含ませねばならぬ。道具を巧く使うと使はぬとは。文章の上手下手の分る、所である。道具とは

花笑ひ鳥歌ひ

花と鳥

秋風吹き蟲さへ

秋風と蟲

松の小琴瀧の鼓

松と瀑

圍爐裡の縁

圍爐裡

道具なり

今示した文例は、名句と云はぬが、能くお判りになつたであらう。さて又、景の叙べやうは。

春となりしと云ふ事

は彌多忙になる事尤も酌む事も相當にいそがはしく候はん。呵々。

嵐山より

襖の繪より外に見し事なかりし嵐山。今は現に渡月橋に立つ人、嬉しき事のかすく、御推察願ふの外、書くに筆なきに候。繪葉書に一言斯くば。

是等は幾通りでも書かれます。長うでも短うでも書かれます。景の中には自然に情もこもります。

小池の氷漸く解け、藻草いよく青う、遊魚も春喜ぶらしく候。……

此處、八重山中にも争はれぬ春のしるし、南の軒端には、一輪二輪野梅綻び、奇しき香送るに候。……

薄寒き浅春に候も、今朝初めて聞きし鶯殊に嬉しく何れ雪の山路より村へ旅試みしものと。……

山水佳絶と云ふ事

是等も如何様にも寫されます。只其人の腕の冴え工合によつて、語句には善悪が自然に生ずる。一寸言うて見やう



舟にて上流にさかのぼり、小丘の上なる大悲閣訪ひ申し候。小なき精舎、門も小さく、二王様はさても潜られ申さず。鐘樓の上手には角倉了意の碑あり、保津川を開鑿せる偉人にごさ候。嵐山の花は斜に右の下に見、前面遙かには、京都の町を望まるゝに候。是

は此處にて求めし繪葉書に御座候。

此處、鑛泉場は、大悲閣の下にて候。一浴致し、川端の旗亭にて一杯はじまり申し候。酔うての歸るさ、彼の「花の山二丁上れば大悲閣」の句碑、右手に見つけ申し候。それより山手の花下たどり渡月橋渡り、京美人

常に恐ろしき山も、春は花霞に臥して優しう眠るが如く、水は其裾を緩う流れ居り候て、筏は畫中に下るに候。誰が筆借らば、此さま能く文に上し得るかど……山と申し、水と申し、石と申し、樹と申し、之を唐畫の外に求むべからざるの景……山は屏風の如く東西より迫り居り、溪は藥研に異ならず候て、水は北より奔注するさま、稽古中の僕が筆にて寫し難く候。……ざつと、斯う云ふ工合に書くのである。書くからと云うても、阿房の一つ覺ねでは濟まぬ。稽古する時は其題、實際に臨んでは其事柄により、幾分か筆に變化をさせね

ばならぬ。又、受信者の如何によつても、書き工合を變へねばならぬ。是等は、追々便しやうが、文範などは目で見て口で讀むよりも、頭で考へつゝ、奥齒で噛みしめて貰はねばなりません。又、人に聞くよりも、自身に發明即ち悟る所がなければ、何事も成就せぬものです。

第三 家妹に

〇 來信に曰く。美文風の手紙と申す事に就ては、弟へ下されし御筆にて、能く合點まゐり、さてはと頷かる節少なからず、其後何となう筆暢びやすき様な感じござ候。此上、改めて御教へ願はしきは、長文と短文



に繪葉書など強ひられつゝ、北へ向ひ申し候。それより、天龍寺や、釋迦堂、足にまかせて探り申し候、匂はなし。

御室より

御室と申せば、仁和寺の花にてござ候。樹は古木なれども枝伸びず、何れも根元より花着け居り、遊人の誰彼は、腰より

どの心得。其次には、美文風にするものと、實用的にするものと別にござ候。こは弟とも常に相談怠らず候も、仲々に判りがたく、斯くは伺ひ上げし譯。御筆に御違在らせまじく候も、御兩親様へおたよりの序に、一寸御示し下され度、御願ひ致し候あらく。

手跡も文も追々美事に、怠らずしての稽古の跡、ありありと紙表に認められ申し候。お尋ねの事、承知の上にも承知致し候。同様なる事、彼處此處より問ひ來り居り候處、初學の人々は誰も迷うて判らぬものと存じ候。右は諸方へ一時に、返事する事にせんと存じ候間、暫し待たるべく、吳々も稽古が肝心に候ぞ。申す迄もなく、女子

下は花に埋もりて歩するに異ならず候。是ぞ御室の花さ名高き所以に候はん。

仁和寺は眞言宗の大本山、仁和四年の創立に之れ有り、代宮門跡の名刹に候。樓門、五重塔、古松の間に聳え、堂宇は花に擁せられ、一しほ佛徳高く見られ申すにて、山中に

は言葉使ひやさしく、一寸文章見ても其年や其心の底まで、文字の上に見らるゝ様な、書振こそ願はしきもの。常に此心掛けさへ有らば、極めて見はれ易きものに候へば、必ずお忘れなき様に、序に一言書き加へおき候。

第四 長文と短文との別

事實に千差萬別ある手紙に候へば、此を長文にせよ、彼を短文にせよ、と豫め示さるべきものに之れ無く候。其長かるべくして長きは、十尋百尋に及ぶも何とて悪しかるべき。尙ぶ所は、意を盡し用を達する一點に在る事に候。其短かるべくして短きは、三四行にても宜しく、出



四國八十八箇所に擬したる靈場ござ候。

妙心寺にて

此處も亦名利、仁和寺と相距る遠からずぼつ／＼歩いて訪ひ申し候。境内は廣くして、數知れぬ程諸寺院ござ候て、左右に構へられ、數くに切石を以てせられ居るに候。裏門に入りて少し進めば、右

に佐久間象山先生の墓ござ候。やがて本門に出て申し候。

妙心寺は、もろ清原左大臣夏野の別業、のち花園上皇の離宮となりしもの。更に寺さし給ひしものに候。此寺の床しきは一回も兵馬等の災に罹らず、七堂伽藍むかしの儘なる點にござ候。山門も莊嚴に候

近畿だより

來得べくは三四字、一字にても亦妨げ申さず候。初學に戒しむべきは、簡短にして意を盡し用を達し得べきを、殊更に無益なる筆を弄し、浮游の文句を穿鑿して、長文にするの弊に之れ有り候。此弊には、美文風を尙ぶもの最も陥り易く候。これは、長文に物せずば、詩的感情を述ぶるに足らずとし、又そを人に訴ふるに足らずと爲る誤解より生ずるらしく候。すべて詩的微妙の感は、寧ろ短文の中に存し、腕冴えし人の筆には、一字一句にして此妙を發揮せらるゝものに候。下手の談議は休むに如かずとの喩の様に、要らぬ事を書くは悪く候。只何事も稽古の結果にして、詩かぬ種は生へぬものに御座候。

花見や野遊の如き美文ならば、長くも短くも其趣向によりて書かれ申すべく候も、實際に臨みての手紙は、逢ひし事件により、長うも短うもすべく、要は意を盡し用を達するを程度として然るべく候。併し、稽古として假りに設けし手紙文題に對しては、長短何れにも書かれ申すべく候へば、其一方に就て趣向立て、然るべく候。葉書文は絶對に、短文ならずば悪しき儀と悟らるべく候。申せばとて書けばとて、龜の甲より年の功と申す喩の様に、稽古仕上げて後ならでは、其妙處には達し難きものに御座候。追て、一題につき長文短文二章の書き分けは又の便にと、以上は能く咀嚼なさらずば、甲斐あるまじ



旅館にて

花見に日暮し、電車  
さへ漸く尋ねだし、  
先刻此處へ草鞋解き  
申し候。明日は東  
山見物の筈。夜櫻あ  
らば、祇園訪ふべき  
筈なりしも、其儘見  
合せ申し候。若手達  
は京極はだしにし  
て、處々へ夜の見物  
に出掛け申し候。僕  
一人日記の手入中に  
候。

○議 論  
と存じ候。不盡。

第五 一題長短文の二章

前便に御約束しおける、一題につき長文と短文の二章、  
今書き分けて御覽に入れ申すべく候。假りに題を『京見  
物誘引』と致し候。

長文の例

京都は山秀で水清く、到る處名勝古蹟を以て満たされ  
居り、一步毎に景變り興動き候て、路を東山に取るも  
西山に取るも、花紅葉の眺め宜しく、寺樓祠宇は參差  
として樹梢に抽きんで、千古の歴史を誇るにて、俗士

東山見物

朝早く、先づ四條橋  
畔の柳に送られ候て  
八阪神社へ向ひ、樓  
門潜り申し候。  
名高き夜櫻の一本  
木、葉さなりしを眺  
め候て、正面には圓  
山のさまを見、左し  
て知恩院叩き申せる  
僕共、眼を皿のやう  
に致し、隅から隅ま  
で見物すまし候。

短文の例

少々古臭き語に候はんも、京都は我國の一大公園、名



近畿だより

○ 圓山の彼處此處も一  
通り眺め、途中にて  
瓢傾けつゝ、清水に  
詣で申し候。世に評  
判高き舞臺の人とも  
相成り、音羽瀧をも  
尋ね、それより西大  
谷へ出で、三十三間  
堂や、大佛殿や、豊  
國神社は、横目に見  
やり、足を棒に致し  
今朝辭せし宿へ歸り  
申し候。

○ 議 論

二十

所古跡に圍まれて都を成し、一丘一樹も尙能く千古の  
歴史を秘むるにて、叩かば精しく語るべく候。而も山  
水秀靈、殊に訪ふに宜しきは、花の此頃候はずや。  
さりさて、飛脚の様にしての旅も興淺かるべく、一夜  
を嵐山の旗亭に明し、翌日は東山の勝尋ねて清水にと  
ごめを刺し、夜の電車にて歸らばやと存じ候。日は明  
後日の積りに御座候。  
更に短きものとならば  
歴史に名を揚げしが芳野の花に候は、浮名を桂川に  
流せるは、嵐山の花にて候はん。要するに、名所とし  
ての甲乙は之れ無く候。明日、渡月橋上の客となりて

御苑通りて

後一筆

御苑と申すは舊御所  
の事にて候。一面の  
芳草烟をこめて、春  
淋しく、彼方には巍  
然として聳ゆる紫宸  
殿、仰ぎ見るも畏く  
候。處々に花、處々  
に松、昔のまゝなる  
が貴く候。東南に、  
樹木の茂れる所は仙  
洞御所、北に並べる

近畿だより

○ 議 論

二十一

如何に、御意見伺ひ上げ候。不宣。  
問題外に候も、用さへ辨すれば宜しと云ふ通俗風の書翰  
の例もとならば  
花見遊山は、學生に不似合の催しかは知らず候も、嵐  
山は古來の名跡、歴史上の参考、兩三友相語らひ  
同行の事に致し候處、尊兄にも御遊び如何。日は明後  
の日曜、無論日歸の筈にて候。草々。  
先以て斯の如きものに候はん。題に京見物と、時候を示  
して居らねば、一は夏にし一は春にしたる譯、春の京見  
物誘引と題ならば、云ふ迄もなく春を中心とせざるべか  
らず候。此他は、御類推願はしく候。



は大宮御所にて、前のは上皇、後の皇太后の住まはせ給ひし御殿にて候。

北野より

御所の直ぐ西に護王神社を訪ひ、清鷹公の誠忠を偲び、只今北野天神へ詣でし處に御座候。梅は葉さなり、櫻は數ふるばかり、松はみどり濃きが天を成すに候。

第六 美文風と實用的との別

先日より度々申し上げ候故、既に御合點まゐりし事と存じ候處、残れるは美文風と實用的との別にござ候。其文の區別は、前便に筆執りし『京見物誘引』の作例にて百も二百も御承知の儀に候はんも、まだ外に申さねばならぬ事御座候。此二體の區別は。

- 第一 文題によりて別立つる事。故に實際に臨みては、其事件によりて別立つる事に相成る譯。
- 第二 受信者の身分如何によるべく候。又、發信者にもよるべく候。

平野神社の

茶店にて

菜花 畑の中を逆りて詣でしは、此處平野神社、社格は官幣大社、名は既に夜櫻に知られ居るに候。少々の殘花を賞して先づ烟草一服、序に矢立ぬき、此一箋認め申し候。少し進みて、金閣寺へ参る筈に御座候。

何故に、文題によりて別立つるかど申すと、題の性質によつて美文に書き難きもの御座候。直段問合の如き、金子借用依頼の如き、遭難見舞の如き、議員當選を祝するが如き、佛事案内の如き、皆是れ實用的とすべきものに御座候。花見や月見に誘ふが如き、轉居や新築祝に招くが如きは、之を二様に書かれ申すべく候。出産や婚姻祝ふが如きは、強ひて筆執らば、美文らしく書かれ間敷ものにも非ず候も、餘程筆に長けずば出來難く候はん。その事件によりて別立つると申し候事は、以上にて自然と悟られし儀と存じ候。さて又、

受信者の身分によりてと申せしは、子として親、生徒



近畿だより

### 金閣寺にて

義満の豪華の名残な  
る金閣、今は名のみ  
に之れ有り候も、林  
泉の妙筆に記し盡し  
難く、是も例の寫眞  
にて御覽願はしく候  
それが即ち是。眞の  
寺號は鹿苑寺、竹樹  
うち圍み、路は苔深  
く、歩を運ぶ毎に雲  
は履下に生ずる心地  
致され申し候。

### 南禪寺

今日は東山の北部の  
見物に出掛け申し候  
山陽の詩に、一帯青  
松不連さ之れ有り候  
も、今は人家町を成  
し候て、俗に成り居  
るに候。境内には長  
松高木蔚として人  
間を隔て、流石の淨  
域を評したく候。  
勝跡も随分多く、  
日記も肥え申し候。

近畿だより

〇議 論

二十四

として先生へ呈する手紙にして、事件は美文に書かる、  
性質のものにしても、そを程々にすべく、餘り筆走り過  
しもせば、輕薄に流れて失禮に當るべく候。年少者など  
に贈るものは、何れも心して書きたきものに候。又、發  
信者によると申せしは、言はずとも前段にて御合點まゐ  
りたるべく、是等の事考ふるも、亦勉強の一に御座候。  
僕は、極めて美文風書翰を好むものに候が、同時に實  
用文の書振をも正確にせんと欲する一人に御座候。正確  
とは、語格に合するを申すにて、致し候と致すべく候と  
の別などを、明かに誰でも書く様に願ふものに御座候。  
商業用の手紙は別として、美文風の筆に熟さば日用の出

來事は、朝飯前の茶漬のやうに、さら／＼と何の造作も  
なう書かれ申すべく候。書翰に就ての筆は最後に付、此  
事書き加へおき候。不備。

### 友の剽竊論を駁す

◎來信に曰く。聞く君、剽竊せられて憤慨すと。併し  
君、剽竊にも程度あり。之を道德より見ると、之を法  
律より見ると、大相違を來さざる間敷ものに限らずと  
存じ候。蓋し、文章の價值、從來法律に認められし例  
なく、従うて侵害是非の審判、最も六ヶしき事と思へ  
ばにて候。道德上よりは、固より許容すべき事件なら

〇議 論

二十五



近畿だより

永観堂より

南禪寺の北に隣れる  
名利、浄土宗西山派  
の一本山、紅葉の名  
所に御座候も、櫻花  
咲く此頃も願る遊人  
多く候。

若王寺にて

此處も四時來り遊ぶ  
に宜しき處、落花の  
雪に醉顔撲たれ、暫  
し徘徊致し候。

銀閣寺にて

義政の思ひつき、金  
閣の向ふを張りし名  
残に候。庭園は相阿  
彌の經營、天下の勝  
を一庭に集めたる想  
致され申し候。

眞如堂にて

芹舎が句に、  
よきもの、餅屋は  
淋し花の時  
此處も古來紅葉の名

近畿だより

〇 議 論

二十六

ねご、正しく剽竊とたしかむるには之を訴ふる處之れ  
なく、終に著作權法に問はざれば對ふまじく候。之に  
問ふは至當なるも、前にも申せる如く六ヶしき問題と  
存じ候。余は君と同じく筆にて世に立つ者、最初より  
同情すと雖も、彼に對して此に斯う云ふ辯護者ござ候  
に付、能く御聞き願はしく候。

〇君が剽竊せられしと疾呼するものは、悉く是れ和漢  
名家の用るし語句なり。彼れ之を用るしは、君が用る  
しと同一にして、決して剽竊には非ず。

〇書翰文は取るに足らざるの體なり。参考や編輯の一  
法として、之を自己の作中に取り取るも決して剽竊には非

ず。一文を其儘に取らば、或は著作權侵害なるべし。

〇議論文ならば、其主意を取りても侵害となるべきも  
美文風一切の文章は、古人の句を羅列せるのみ、故に  
剽竊の名目を附せられず。只綴り方の衝突のみ。

〇漢詩などは起承轉結の法ありて、字を排するには平  
仄あり、苦心の上ならずは名句を得ず。君が書翰文の  
如き、自ら心血を注ぐと云ふも、古人の句を排列せる  
に過ぎざれば、其實なし。

余は以上の四條に左袒するものに候はねご、君が御意  
見聞かん爲、筆にして御覽に入れ候。何れに致しても  
我が文壇の不祥に候も、之を曖昧の中に葬るは、却て

〇 議 論

二十七



所に御座候も、鎮守  
稻荷社前には櫻花多  
く候。解釋は、前の  
十七字詩に知れ申す  
べく、此には略す。

○  
詩仙堂には、黒谷や  
聖護院など訪ひ、一  
寸足踏み入れ、加茂  
の二社へも詣で、取  
つて返し、三條大橋  
さては繩手と云ふ町  
をも素通り致し、宿  
へ歸り申し候。

文藝を輕んずる次第、既に御決心の儀と存じ候も、御  
研究も亦必要、前の申し條に對し、大御論駁あるべく  
候に付、そを承りたく候。餘は御目に掛りてと草々。  
御書拜見。憤慨するは、少々心狭きやうに聞え候はんも  
剽竊せられし事よりも、文壇の腐敗せるに重きを置けば  
既に覺悟せる次第に御座候。彼は肩書付の文士、僕は毫  
も學歷を有せぬものに候も、文藝の貴きを自覺せるは、  
決して彼に譲り申さぬ積りに候。剽竊になるか、成らぬ  
かは、此に獨斷致しがたく、或曉を待ちて後知れ申す  
べく候も、そは未然の事、今度は君が謂ふ所の辯護者の  
説、一々辯駁試みんと存じ候。

○奈良より

明治帝の御陵は、恐  
れ多くも汽車より伏  
し拜み、やがて春の  
村々通り、加茂を經  
て奈良へ達し申し候  
今日一日、愉快に此  
に暮す筈、兎も角も  
斯くは一箋。

○  
菊の香や  
奈良には古き  
ほこけたち

近畿だより

第一 僕が剽竊せられしと稱するものは、實に和漢名  
家の用ゐし句多し。然れども、自己の文と化せし以上  
は、斷然剽竊と云ふを憚らず。所思を見はすに、適當  
の方法を以て、成語を綴りて文を成す、是れ古來作文  
の法、只才の深淺、工夫の巧拙により、すべての文に  
善惡の別生ず。彼が説によれば、議論文を除くの外は  
自己の發明せる或種の符號を以て意思を發表せずば、  
自己の文章と言はれざる事に歸す。不道理千萬なり。  
世に争で斯る事の出來得べき。

第二 書翰文を取るに足らずとする、彼が説既に誤れ  
り。書翰文は、著作権法第一條に示す所の文藝學術の



是れ芭蕉翁が俳句、奈良をうたひ得て妙に候。大和は建國の地、中にも奈良朝は我邦の文物技藝の淵源を致せるにて、宗教なり、美術なり、旺盛なりしに候。そろく見物はじめ申すべく、葉書も亦ぼつく呈せん筈。

○ 奈良公園は、天然の美と人工の妙さを發

揮せる處、天下何處にか、敵これ有り申すべく、眞に本邦第一の大公園と申すべく候。彼の有名なる春日社、東大寺、興福寺など、皆その一區に在るに候ぞ。

○ 第一に目につくは興福寺の塔に候も、第一に訪ふは例の猿澤池、波は穀紋を織り、鯉跳れば碎け、仲

範圍に屬せざる乎。若し幼稚にして取るに足らずとするならば、巖谷小波先生のお伽噺を剽竊しても、敢て侵害とならざる乎。参考は参考の法ありて、權法第三十條に明文あり。知らずば、僕教へん。編輯も亦法あり。而も著作權を得らるゝ事は、第十四條に規定しあり。参考と編輯と著作と混同せば、得てして剽竊に陥る。剽竊は偽作にして複製なり。而も殆ど全部取れるもの多し。

第三 獨り議論文のみ剽竊するを、侵害とする理由見出し難し。議論文も同じく古人の用ゐし文字を以て、其意思を發表したるものに非ずや。是が侵害となるな

らば、美文風一切の文章も同じく侵害とならざるの理由なしと斷ず。其主意を取るも侵害となること、先づ我が意を獲たり。こは一切の文藝に於て然らざるを得ず。古人の句以下、一時の遁辭にして、辯駁を加ふるの價値なし。且つ既に第一に陳べおけり。

第四 漢詩は、僕聊か覺えあり。平仄を排し、韻字を押し、一定の規式に合せるにより、剽竊せば著作權侵害となること、是れ亦頗る我が意を獲たり。敢て問ふ書翰文に法則なき乎、在り。漢詩は、古人の句を巧妙に排列したるを先以て上乘とす。然るを、獨り書翰文のみ、侵害にならずと云ふ如何。



仲に興深く、東の岸には、厭世宮女采女が名残、衣掛柳東風に絲くち憐れに見られ申すに候。

興福寺は法相宗、藤原氏全盛時代の遺物に之れ有り、南圓堂北圓堂、三重塔、五重塔、東金堂に金堂何れも観るべく、花は少し散りたれども處々のもの賞すべ

く候。東の花の松も美事に見られ候。

雪消澤、野守池の舊蹟を探り、氷室神社博物館を左にし、廣き路たざるに候が、是ぞ春日社の賽路にござ候。やがて本社へ詣で、幾多の勝をも尋れ、若草山の麓にて、酒飯したためんとする所に候。

以上は要するに、こじつけ辯護と申すべく候。只議論文ならば、其主意を取りても侵害となるとしたる點、至極賛成に御座候。議論の妙は、人の氣づかざる所を道破したるに御座候。詩歌其他美的文章の妙は、人の見聞する所につき、美妙の語を適當に排して、其情なり景なりを普通以上に表はしたる所に御座候。其妙處に至るには、所謂心血を注がずば、決して能はざる儀かと存じ候。尙最後に實例を示し申すべく候。彼が『桃花を贈る』と題せる文に、

此處なる山家、櫻なきに非ざれども、それよりよきは桃の花、一村は紅霞に鎖され候て、賤しき藁家も畫中

の物、水も清う流れより、鶏の聲も長閑に聞かるるにて候。今朝村童に托し、これなる一枝參らせ候。又一重添へしは草餅、今しも桃の節句に候へばなり、花も是も僕が寸志、其田舎よりせるを愛で、御隙なれば武陵桃源の人となり給へ。僕が文を對照の爲に寫さば、

大阪の昨今は如何に、新町の夜櫻は散り失せ候はんも櫻宮さては造幣局、花の眞盛に候て、綺羅雜沓、水も陸もさぞ賑はしかるべく、去年の舟遊思ひ出で申し候此處なる山家、櫻なきに非ざれども、それより好きは桃の花、一村は紅霞に鎖れ候て、賤しき藁家も畫中



紅葉のにしきかみの  
まに／＼と歌はれし  
手向山神社にも参詣  
致し、尋で二月堂、  
三月堂、四月堂をも  
叩き候。是等は東大  
寺に屬するものにて  
何れも有名なる建物  
に候よ。

○  
東大寺は大佛の有る  
名刹、八宗兼學、  
華嚴宗の總本山に之  
れ有り、聖武帝の勅

建に御座候。七重塔  
は倒れてなし、竹外  
の詩に、半宮涌出兩  
浮圖とあるは、此處  
のと興福寺を咏ぜ  
るものに候。

○  
いにしへの奈良の都  
の八重櫻は、師範校  
の門内に名残を留め  
轟橋、雲井阪は官  
邸の北に之れ有り、  
何れも八景の一に班  
し居るに候。

の物、水も清く流れ居り、鶏の聲も長閑に聞かざるに  
て候。今朝、此媪町に出づべし、例によりて用はなき  
乎との問ひ、よき序だとこれなる一枝参らせ候。  
又、一重添へしは草餅、今しも桃の節句に候へばな  
り。花も是も僕が寸志、其田舎よりせるを愛で給へや  
君は、之を剽竊と見給はざる乎。古人の句のみを排列し  
たるものと見給ふ乎。彼が所謂綴り方の衝突、語を代へ  
云は、暗合と評し給ふ乎。而も文字を取り、主意をも  
全く取り居るに候はずや。僕が文に、今しもとやるは、  
今日しもの誤りなるに、彼は誤りのまゝを取れる、殆ど  
一笑に價せざるべく候。君は如何に思ひ給ふ乎。

○  
文壇に風流の罪過と申す事は之れ有り候も、剽竊は鈍  
賊を以て目せられ、不徳も亦甚しきもの、彼が辯護に立  
ちし人に向うては、前に掲げし文に對し、何時の頃、何  
人が作りたる語なるかを、示されんことを請ふもの、若  
し之を示されずば、僕が作れる語句と云ふ事を認められ  
し者と斷すべく候。是に於て乎、全く剽竊たるを、認め  
られし事に歸し申すべく候。

○  
僕が剽竊と認むるもの、二書に涉りて九十六題、他の  
一書のを加ふれば、更に十四五題を増すに候。僕が能く  
忍ぶべき乎、忍ぶべからざる乎。君が言を待つて知らん  
と欲するに非ざれども、尙他に説あらば死する迄をも辯



近畿だより

### 紀國へ汽車にて

遊び序に云ふ説き  
芳野の花に後れし埋  
合せに云ふ説き、  
何れにしても僕はお  
伴逃れぬ紀伊路の旅  
り、粉河寺へも参ら  
ずして、通しに和歌  
山へ着、見つけし旅  
舎に飛込み、夢結び  
申し候。

### 和歌浦より

此處、圖にて思ひし  
よりは景色よく、區  
域も亦思ひしよりは  
廣く、詩酒によき處  
さ申すべく、ごこへ  
も旗亭の多きには閉  
口致し候。

○  
長汀曲浦、清波は  
白砂を洗ひ、明月は  
松風に送らるゝと  
申すさま、朝夕の眺

近畿だより

### ○議 論

駁試みんとする僕に御座候。草々。

三十六

### 學友に旅行を勧む

旅行は活ける學問と申す事は、今更の儀にも之れなく候  
て、行く先々に逢着する物事は、活ける教科書と申さ  
るべく候。語を代へて申さば、旅行は實地見學に之れ有  
り候、商人は商況の視察とすべく、政治家は文物制度を  
視察すべく、文學者は政治家と同じ方面にも、人情風俗  
山川地理の一々、皆是を視察すべく、何れも参考に供し  
て、自己の才學に資せんとするに候。  
御同様なる學生には、夙に修業旅行行はれ居るに候は

ずや。君は今し學校に斑せられず候も、尙諸學科に身を  
寄せらるゝ人に候。況して詩歌文章の才に富ませられ居  
る事に候へば、折々は御旅行望む僕にござ候。御書齋に  
籠りて讀書三昧、萬古の聖臨と談じ給ひ、且つ千里の山  
川に接し給ふも宜しく候はんも、此法稍もすれば席上の  
論と同一に陥り易く候。是れ、僕が君に御旅行勧むる所  
以に御座候。

○  
君が唯一の避暑法としては、室内讀書を主張し給ひし  
も、終に近海の磯家へ客たる身を喜ばれし事實ござ候。  
旅行も亦此類、是非山川御跋涉相促し候。前に申せし活  
ける學問の證左としては、いにしへ既に之れ有り候。更

○議 論

三十七



め、晴雨の景、一さして宜しからざるはなき此處にて候ぞ。

○ 太鼓橋とは、不老橋の一名、圓く反りし故の名が、反橋にて妨げ申すまじく候。海へは片男波、蘆への濱など申すに候。

○ 龍山とは、浦曲に臨める小丘の名、絶頂には望海樓の遺址で

さ候。聖武帝の遊び給ひしも此處にて候今は碑ござ候。

○ 訪ふべきもの、多き中に、玉津島神社、東照權現社、南龍神社、天満宮等は著名なるものにて、浦に来る迄にも、叩くに足るもの無きに非ず、只忙しくて書き盡しかたく候て、此には漏し申し候。

に精しう申し候はんか、張説と云ふ人、岳州に謫せられ候に、詩愈々悽惋と相成りしを、時人は江山の助を得たりと評せし由、唐書に見え居るに候。故に爾後、山水の風景、人の詩歌文章を助けて、佳作を成さしむる典故と相成りしに候。僕は更に筆を進めて、古蹟も亦然りと申すものに御座候。

君にして、若し閑暇なしと云ひ給は、讀書の時間を積みおき、數日に代へて可なるに候はずや。又若し費用なしと云ひ給は、書物買ふ費の一部分を割き、以て之に充て、可なるに候はずや。讀書固より佳癖なるべく候も、日夜耽り給うては、御健康の爲に悪しからん。僕思

ふ、讀書の要は、才學を博くし、見識を高むるに之れ有るべしと。併し、之をして益有効に活用するは、實地に接觸せざるべからず候。君は既に、此事の誣ひざるを磯家に驗し給ひしに非ずや。如何に、如何に。僕は是非の御返答待つものに御座候。

往來不便の昔ならば兎も角、今は交通機關大に發達致し、千里も猶比隣のごとき便これ有るに候はずや。而も君は東西南北、何れに走りても自由自在の中心地、浪華に家居なしながら、一步を門に致されざるは、愚も亦甚しと申すべく候。君にして、詩歌文章を遊戯視なさるゝならば、僕重ねて申し上ぐまじきも、平素云ひ給ふが如



○ 名高き妹背山さば、小橋架れる拳大の島に候。西湖の六橋に擬せりさ申す三斷橋越ゆれば、路に島を繞りて、波はその下に激蕩たるにて候。右に折るれば先づ下り松、觀海閣、多寶塔、龜岩、鶴駕飛降碑等ござ候。東に烟波を中にして、紀三井寺を望み、西南は

く、眞實に研究し給ふ御精神に候はゞ、飽くまでも名勝古蹟御探尋の旅、し給へと勸むる僕にござ候。百聞一見に如かずとの一語、君は如何なる意味に解し給ふ乎。僕は例により、腹藏するを好まず、又何事をも腹藏し通すの大度量に乏しく、終に斯の如く聞え上げしに候。◎ 返信に曰く。御議論よく聞え、且つ始終愉快に拜見致し、小生が十年の蒙、忽ち君が爲に啓かれ申し候。百聞一見の語、常に心に貯ふるもの、只君が筆に傳へられしにより、偶小生をして悟らしめしに候。御返事としては、右にて既に十分に之れ有り申すべく、只自今驗したきは、活教科書の成績にて候。拜復。

蒼波限りなく、白帆畫に入るに候。

青年會設立協議

○ 再び三斷橋を渡り、蕉翁が行春の句碑に昔を偲び、且つ此旅にも風流を感じ、花の老いゆく故郷をも思はれ申し候。以上、蘆邊屋の酒間に、幾枚かの葉書に墨塗り申し候

○ 議 論 すべて先導者たらんとする者は、吾々青年に候はずやすべての改革者たらんとする者は、吾々青年に候はずや青年の責任、亦重且つ大なりと申すべく候。吾々各自天性を異にするは勿論に候も、常に期すべきは堅心松の如く、高節竹の如く、清奇梅の如く、温雅櫻の如く、秀麗蘭の如く、俊逸菊の如く、超俗蓮の如く、獨特の美を發揮せずばと存じ候。而も一方に覇者たらん事を覺悟すべく候。其政治家となり、文士となり、軍人となり、航海師となり、實業家となるは、固より問ふ所に之れなく、



を東へ進むにて、左  
右の眺め極めて宜し  
候。橋渡れば、や  
がて寺の山下、仰げ  
ば花散りやらぬもの  
白く、香烟は名草山  
上の雲と化するさま  
仲々ゆかし候。

幾百段も知れぬ石  
段登り、初めて境内  
に達するに候。眞の  
寺號は、金剛寶寺護  
國院と申し、古義眞

御同様に望む所は、只一の成功のみに御座候。併し、成  
功と申すものは、螢雪に學び、艱難に處し、貧賤に堪へ  
得たるの結果のみに候はず。又、學資に供し得たる黄金  
を以て、鑄り得しものにも候はず。天資を養成し、終に  
此に至らしめたるものは、果して何にて候べき乎。皆是  
れ父兄の恩惠にて候。皆是れ朋友の恩惠にて候。皆是れ師  
の恩惠にて候。皆是れ先進の恩惠にて候。皆是れ我が  
大君の恩惠にて御座候。皆是れ社會の恩惠にて候。而も  
恩惠は、黄金や物品を以て酬い得べくも候はず。假りに  
酬い得べしと致し候も、社會は恩を與ふる美德を好み候  
て、恩を市るが如き惡徳をば望まず候。社會の望む所は

言宗に之れ有り候。  
寺樓よりも、佛徳の  
有難きよりも、僕は

景色の好きに酔ひ申  
し候。これぞ、和歌  
浦見物の終りに候  
早くは、市の舊城と  
存じ候も、急ぎて電  
車の人となり、大阪  
へ向ひしに候。

寶塚の温泉

より

日本一と申す温泉

幾多の歲月を費して、獲得したる藝能を活用し、之を天  
下に施すに在るのみに御座候。

以上は、吾々が持論に御座候處、今度設けんとする青  
年會、大袈裟にも此持論を實現せん希望に候はねど、何  
事にも全村一致の行動を執るは勿論、必要ある毎に其事  
の研究を爲し、農桑教育の事業には最も重きを置かんと  
するものに御座候。聊か發展したる曉には、村の子弟  
をして遊學せしめ、其適所に隨うて玉成せしむべく候。  
此儀は、近き將來に於て、必ず實現を見んとするものに  
ござ候。世の事は何も彼も、言ふは易く、之を行ふは難  
く候も、事の成不成は、吾々の意志如何に在る事に候へ



近畿だより

しかも其經營社の電車にて参り、一浴試み、大阪の紅塵洗ひ落し候。念の爲にさ川向の舊温泉にも浴し、炭酸煎餅土産として歸り申し候。一罐小包に呈しおけるが、即ち是。

箕面より

初夏の箕面殊によるしく、青楓必ずしも秋に譲るまじく、瀑

○議論

ば、此點は格別憂ふるに足らずと存じ候。貴兄は申す迄もなく、尊大人へも主意御取次願ひ、御賛成下され候やう、御取成し下され度、餘は拜芝萬々開陳致すべく候。◎返信に曰く。朶雲奉讀。堂々たる御議論、青年會の前途をして光彩あらしむる、疑ふまでもなき事に御座候。小生は固より左袒。父へは折悪しく。未だ耳に入れ申さず候も、農事や學事は熱心に付、必ず相應援助致し呉れ申すべく候。只恐るべきは。名のみにして實舉がらざる一點にござ候へば、心堅固の士を語らひ、以て中堅と致し度候。全村の青年、誰一人として心堅固ならぬ士は有るまじきも、一意此事に當りて差支な

の前にも立ち、溪の茶屋にても酌み、一日を愉快に遊び、日暮に大阪に向はんとする所にござ候。秋には又一遊し、紅葉詩に入る、答

動物園にも一寸立寄り申し候。なか／＼に賑はしく、交通開けし今日、小兒等數多、大阪方面より父母ねだりて來遊、春

近畿だより

き人、即ち貴兄如き人物を幹部に置かんとする鄙見に御座候。追て、發會なども、十二分に用意整ひし上に致し度、事は旗擧げが大事にて候。

我邦の山水と仁義との事を

見給へ、玲瓏として萬古、雪を含むは富士山では有りませんか。激澗として千頃、碧を湛ふは琵琶湖では有りませんか。一目千樹、雪薫じ風白きは、芳野の春では有りませんか。亂松孤月、金湧き龍躍るは松島の秋では有りませんか。天地の美は此處に宿つて、乾坤の秀も亦此處へ鐘まつて居ます。外國の外、我邦に遊ぶもの、山水の

○議論



近畿だより

より秋にかけ、電車のお客は、皆この人にて満たさるゝに候。旗亭もござ候。

堺の大濱よ

り一筆

濱寺開けてより大の不景氣、變遷驚くばかりに御座候。只變らぬは海の眺めさ涼しき風さに候。公園内も随分さびれ居り候。是も申し譯ま

○議論

四十六

景を論じたり、花月の勝を評したりして、世界の樂土と申し、又は東洋の公園なりと稱して居ます。君でも僕でも、外國人を待つに樂土を以てもしやう、又は公園を以てもしやう。併し、能く聞き給へ、その山水秀靈の氣、時としては仁ともなり義ともなる。忠臣となり孝子ともなる。烈婦俠客ともなれば、英氣豪果の氣ともなるではない乎。又、能く見給へ、その花月の精は、武威となりて發揮したり、文華となりて煥發する。故に我が國民が皇室を崇め、國家を愛し、以て義勇公に奉じ皇祖以來二千五百餘年、偉大なる國粹を保存する所以のもの、實に此に存して居るのである。我が國が世界の表

での一箋に候。

○

大濱よりの歸るさ、蘇鐵と土佐武士が割腹して名高き、妙國寺をも訪ひ、大寺餅の味をも試み、南宗寺には千利休、牡丹花宵柏、一閑齋紹鷗等の墓をも訪ひ申し候。友人の家に

濱寺公園に

遊びし日

近畿だより

○議論

四十七

に卓絶せる特質も亦、實に此に存して居るのである。君よ君、山水と花月とは、一の外觀に過ぎぬ。東方の君子國と稱せられ居る我が日本は、仁義を以て緯となし、文武を以て經となし、此美しい國を作つて居るのである。世界の風潮は澎湃たらうが、終に我に迫る事は出来ません。時の破壊は至強であらうとも、富士山の高きを以て防ぐ事が出来ます。文明の東漸しますのは、琵琶湖の寬きを以て、之を容るゝに客でありませぬ。芳野の花、松島の月、天長地久と共に、世界と人と樂しみませう。僕が日本觀ども申すは是です。君は御同意であるまい乎。暇の時に讀んで呉れ給へ。又、漢文に直して見給へ。



堺大濱の繁昌を奪ひ  
しは此處、大阪灣を  
隔て、武庫山より西  
へかけての連山を望  
み、西に淡路島、南  
には紀伊の峰巒を望  
み、晴雨共に宜しき  
處、此頃の納涼には  
唯一と申すべく候。  
地たかく松青く砂白  
く、水清く、須磨さ  
ては舞子の景色に似  
通ひ居るに候。今宵  
は月、上るを待ちつ

つ一筆

西宮に海水

浴試みて

香櫛園に遊びし序に  
立寄りしに候、地は  
大阪と神戸との中間  
東西は紀伊の峰巒、  
西に淡路島を烟波の  
際に見望み、汽船帆船  
何れも畫中の物に候  
海水は清きも、浴客  
最も雑沓言ふべから  
ず候。只月の夜に、

近畿だより

筆に添へて弟に

後の日曜に京都に遊び候ひし故、鳩居堂の筆、大中小三  
本呈し候。今度、大中小の三本に限りしは、少々聞いて  
貰ひたき事ありてに候も、先づ單に筆と申す事より筆執  
るべく候。

筆の壽は、一ヶ月餘をも使はれ、甚しきは一日に役に  
立たぬ様に相成るべく候。筆の性は鋭く候も、その鋭き  
を以て、一日にきれる譯には非ず、動く事の甚しきが爲  
に御座候。併し、人呼ばざれば倒れ、人呼べば直に起つ  
べく候。筆に口なく候も、能く人の勤惰を語るに候。故

に筆の壽の月なると日なるとは、人の勉不勉を證するも  
のと御承知なさるべく候。

筆の大中小は、もと大中小の字を書く爲に作りしもの  
に候。善く筆を使ふ人は、大筆を以ては大字を書き、中  
筆を以ては中字を書き、小筆を以ては細字を書くが常に  
て候。而も時によりては、大を以て中を兼ね、中を以て  
小を兼ねしむる事之れ有り候も、小筆を以て大字と中字  
を兼ね書く能はず候。もと其用に供する所に非ざるを以  
ての故に候。合點まありし乎。大中小の筆呈せるに就て  
は、まだ申さねばならぬ事ござ候。

筆の使用法を知らざるものは、大中小の書を寫すに、



夙川堤の松林に歩する、涼味萬斛、夏を知らざらしめ申し候。

布引の瀧茶

屋より

分けて入る生田の小野の柄もこゝに、くたちやしけん布引の瀧さ、これは加茂季鷹の詠にして、碑に彫られ居り候。飛泉には雌雄あり、神戸市上水道の源泉、眺

大中小の筆によらず、故に字體を失し易く候。而も己が使用を誤りしを咎めず、罪を筆に歸して終にかけぬ筆と申すに候。是は、能くある話にて、其許も一度や二度は經驗の事と存じ候。これ小事の如く候も、法を誤ると云ふ點よりすれば、以後注意肝要に之れ有り、一事が萬事と申す事にも、考へ至らねばならず候。

凡そ、筆の毛に剛きあり、柔きあり。是恰も人の性質に剛柔あるに異ならず候て、善く書をかく人は、亦善く之を使ひとなして、我が意の如くにするに候。細かに考へ見候へば、人を用ゐるの法と、筆を使ふの法とは、全く其理は同一なるに候。其許は、やがて人の上に立つべ

めも亦雄壯に、夏忘るゝに宜しく候。

生田神社に

詣で、

地は生田森、申す迄もなく、源平の古戰場、平家方の東門を置きし處に候。境内には嚴の梅、梶原井月、敦盛萩、生田池などござ候。神社は官幣大社、三の宮驛より近く候。

近畿だより

く、此儀能く肝に銘じ置かれ度候。筆と同じく、善き人を相るものは、其人の短所を避け、長所を擇びて之を用ふるが常に候。天下に長たるものにして、人を用ふるに此法を以て致さんか、世に愚者は之れ有るまじく、況して賢人才子をやと申すべく候。筆三本に就ての説明、馬鹿げた事とせられんも、皆是れ古人の説にて候ぞ。

◎返信に曰く。久々にての御手紙、嵐山や東山あたりへ御愉快の御遊、申す迄もなき事と存じ候。常ならば花はしかくなりと、美文風の御筆参り申すべきを、今度は又筆を種に、さまざまの御説、如何にもと頷かれ申し候。私も自ら鞭ち勵み申すべく候へば、御安



近畿だより

楠公社にて

湊川神社にも詣で  
嗚呼の碑の前にも立  
ち申し候。菅茶山の  
詩に、月暗楠公墓畔  
村さ之れ有り候も、  
今日多聞通三丁目  
にして、繁華の中心  
神戸一帯の變遷推し  
て知れ申すべく、湊  
川は埋立てられ、既  
に立派なる町さ相成  
り居るに候。

牛瀧に紅葉

狩して

東向の山、寺の境内  
よりは望み難く、十  
町餘手前の、東風谷  
橋よりの景宜しく候  
寺樓の附近には、楓  
樹観るべからざるに  
も非ず、此繪葉書は  
多寶塔にて候。右に  
鐘樓、左に本堂の大  
威徳明王殿、役行  
者堂、一段の高處に

近畿だより

〇議 論

五十二

心成し下され度。習字は、他の學科に追はれ勝にて、  
動もすれば怠る理窟に陥り候も、一寸筆執る時に際し  
ても、決してインキなど使用致さず、態々硯へ水入れ  
其度毎に字の稽古と心得つゝ、一二年も續かし居り申  
すに候。作文は、常に自修仕り居り、東京の文學院へ  
添削し貰ひ居り候。作れば作る程、段々六ヶしく相感  
じ候處、是は稍その道に入りしぞと、昨日も父上に聞  
かされ、さてはと手を拍ち申し候。長ずればとて、人  
の上に立つは覺束なく候はんも、人に隨うと致しても  
御示しの事、應用せられ申すべく、何とて忘れて宜し  
かるべき、骨に刻つけおき申し候。奉復。

訴追見合せの忠告に答ふ

◎來信に曰く。先日御申し聞けの一件、いよく御所  
信通り、それく御手續成されん筈の由。右は御立場  
として、平素の御氣性よりしても、毫も御無理なき  
事と存じ候も、今一應御熟考の餘地これなく候や、意  
見聞え上げかたたく伺ひし次第に御座候。  
一本の筆とて、輕んずる文士は之れなく候はんも、  
君がやうに重んずる人は之れなく候。此一事、以て今  
回の事件の前途知られ申すべく候。剽竊は、此上もな  
き不徳義に候も、君がやうに重く見る文士は、世に有

〇議 論

五十三



近畿だより

は大師堂ござ候。

○  
是ぞ三段に落ち居る  
飛泉、瀑と呼びずば  
なるまじく候も、何  
れも低く、雄壯と評  
するに足らず、地も  
亦幽ならず、箕面に  
比すれば小指にも當  
り申さず候。

○  
牛瀧と名づけし事や  
此處の寺の歴史は、  
さても繪葉書の隅に

は盡し難く、別なる  
紀行に詳記して御覽  
願ふ筈にござ候。

### 箕面の秋探

りて一筆

昔は大阪より遊ぶに  
も、草鞋はきし山の  
中、今日數時間に往  
來自由の電車通ひ、  
便利も亦甚しく、山  
の入口などは宛然た  
る市街を成し居るに  
候。拙堂の遊記に御

近畿だより

○議 論

五十四

るまじく存じ候。是も亦今回の事件の前途知られ申す  
べく候。君は文壇の不祥と憤慨すれど、彼は當世普通  
の事と平然たらん。是最も衝突の甚しきものに之れ有  
り、隨うて法律は、君一身上の事件と見るべく、決し  
て文壇を代表したる訴追と見ざるべく候。而も御實行  
の曉、彼は路なきを逃れんとし、足場を嫌はざるべきも  
君は整々堂々として正門よりす、其利と不利、事を待  
つて後知らざるなり。此點、殊に御再考あらまほしく  
候。

著作權法よりすれば、一も二もなく法律問題なるべ  
しと雖も、由來德義上の事件、圓滿なる解決之れ有り

申すべく候。君が精神を能く知る人は、一の非難加へ  
まじく候も、斯様なる事件は往々世人に誤解されやす  
きもの、殊に君が今回の御處置につき、其精神の在る  
所を知る人は、數ふる程も有るまじく候。是も結局は  
御不利の點にして、御所信を貫く上に妨害と相成り申  
すべく候。將來に於ても、亦何かの上に御利益少なか  
るべく、此點も御憂慮申し上げ居るに候。

文壇廓清と云ひ、惡徳出版業者懲戒と云ひ、極めて  
正大なる御意見に御座候も、果して御満足を得給うて  
世も之を認むるに至るべき乎。凡そ一己人の事件を以  
て、廣く天下に反響せしめんとする、決して容易の業

○議 論

五十五



○ 騷染の君は、一寸  
驚き給ふべく候。

○ 左に得し蓬萊橋は  
動物園の入口、此處  
に小供連れて入らば  
何れ半日仕事、瀧は  
夜に入り申すべく、  
さりさて、電燈晝を  
欺げば、決して恐る  
るには足らざるに候  
次に得しは一の橋、  
是ぞ山の門とも申す  
べく候。

に非ず、君は尙しも信じて動き給はざる乎。只々双方  
の打ち合ひ如き事にて終りはすまじき乎、と私かに存  
じ居り申すに候。

是迄、かゝる事件なきに非ざる由、右は何れも双方  
の示談にて解決し、毫も法廷を煩さざりしとの事に  
候。示談は、もと法律の許す所、決して人格に關せず  
その關するは條件の如何によるのみ、其處は君が御心  
に存する事に候、之を訴追しても、終に金錢問題とす  
る時は、今日の御決心は其先驅たるに過ぎざるべく  
候。

以上は、小生が鄙見。而も其要を摘みしもの、能く

○ 橋畔より景既に凡な  
らず、楓葉黄に紅に  
水聲は涼々たるに候  
やがて得しは山門、  
此處瀧安寺。境内に  
は老楓、しかも眞紅  
に、蜀錦を張りて天  
さするに異ならず候  
只茶店などの多きに  
は、閉口の至りにご  
さ候。

○ 寺は京都の聖護院末

御覽願はしく候。尙又君は、人格權問題に對し、判決  
例を殘さんとの御希望も有る由に候も、是は殊に大な  
る問題、小生は何とも申し上げ難く候へども、御望み  
餘り大に失せず候や。是も序に伺ひ上げ候。

御心配成されての御忠告、鳴謝奉り候。これが他の事件  
に候は、一笑に付し去るべく候も、相手と申し文事と  
申し、僕が日々執る所の筆に對しても、終に思ひ止り  
難く候。此處に申す筆とは。でも付の文士と申す事にも  
神聖と申す事にも、著述と申す事にも、それを業として居  
ると申す事にも、僕を本位として如何様にも御解釋苦し  
からず候。先以て、御返事申し上げたきは、此に至りて



白雉年間、役小角が  
草創する所に候。本  
堂には辨財天、本地  
堂には如意輪觀世音  
行者堂には小角の像  
を安置するに候。三  
堂共に千古の露霜に  
打たれ、さびて寂び  
居るに候。

○  
地はいま、谷と相  
成り、曲りつ伸びつ  
幾度も曲折して路盡  
き申さず、峰盡きば

瀧と思ひ候も、一峰  
又一峰、峰巒眼前に  
湧出で、盡きず、根  
よく歩みて漸く飛泉  
を得候。實は百雷ひ  
びくかさ思ひしに、  
然らざるに驚き候。  
又紅葉多きは、嬉し  
く存ぜられ候。

○  
瀧の高さは十一丈可  
幅は三間も有るべき  
乎。廣き絶壁の右肩  
より落ち、落口は水

は、最早一寸の餘地をもなき儀に御座候。  
命の如く、如何にも徳義問題にして、之を道徳的に責  
めず、直に法律に訴へんとする、誰が見ても僕こそ不徳  
義と爲し候はんも、今回の事件の前には、既に毀譽褒貶  
を置かざるに候。而も彼等は、一點の良心存せず、徳義  
を以て律し難く候。不利も固より承知、只彼を追窮せず  
んば止み難き僕に御座候。極端なる論に候も、反響あり  
しものと見て満足すべく、相手方をば先づ血祭するに異  
ならず候。

編輯屋たらずば衣食出来ぬ大阪に住し、幸にして編輯  
屋たらず、筆をして辱しめずして僕の今日あるものは、

文の貴ぶべきを知るが故にて候。身を文壇の一隅に寄せ  
居るを重んずるが故にて候。吾々が徳義を云ふに至りて  
は、徳義既に地を掃ひ居るにて候。僕は彼に對し、直に  
法律を以てせんとするもの、理由は前陳の次第に候。幾  
重にも、今度の事件の前に来る不利益の儀、甘んじて受  
くる覺悟に御座候。

○  
今回の決心は、僕が一本の筆に酬いんとする而已なら  
ず、其複製と云ひ侵害と云ふは、如何なる範圍にまで及  
ぶかと、法律の見る所を知りたきが爲に候。我國の法律  
は、文學を如何に見居るかと申す事も、亦知らんとする  
ものに御座候。其高く見るか、低く見るかと申す事に氣



近畿だより

湧きて玉を跳らすに候。潭近き所にて腰うち、飛沫四散、日光に映じて七彩を現するに候。こは能く氣をつけずば、何の爲に泉に色あるかを知り難く候。枝さしのべし紅葉、素練に映じて奇しく、すべて名所として耻ぢぬ地と申すべく候。委曲は例によりて紀行にて御覽を乞。

東海だより

上野より

上野は山間の一都會、藤堂公の分城地、名物の田樂よりも名高きは、例の伊賀越仇討ありし鍵屋の辻に芭蕉翁故郷塚にて候。敵討の事は山陽も古詩作られ居り候。舊城地は、頗る景色よろしく候。

東海だより

○議論

づき候へば、吾々文筆に従事するものは、自ら之を高きに致すべきを悟ると同時に、不徳義文士を責め、悪徳出版業者を懲さんと欲するものに御座候。

著作權に伴うたる人格權は、之を民事訴訟に問はざれば、是非相判らざる儀に御座候。是も亦僕が法の裁定を待つ一に候が、是等をも金錢問題と云ふ時は、文筆に従事するものは、常に他の侵害を甘受すべき地に立たざるを得ず、世豈に斯の如き儀有るべき哉と申すべく候。事整々堂々たらば、僕は何事をも憚らぬ心得に御座候。但示談の下の金錢は、飽く迄卻くる僕に御座候。吳々も君の厚意を謝すも、幸に僕が褊狭なるを恕せよ。

○教訓

教訓と云へば、文字既に頭痛起す様に、感せらるゝであらう。けれども、僕は然う思はるゝ程の力もない。又徳もない。人に忠告した事の手紙や、指導した所の手紙を採つて、此處にはめ込んだのみで有る。議論の部に、教訓が、つたものゝ有ると同様に、この教訓の部にも、議論が、つたものゝ無いにも限らぬ。是等は深く詮議だてせず、好い處が有つたなら、採用して貰ひたい。折には間違つた事も有らうが、其は説が合はぬので、不教訓の事は、斷じて無いと信する僕じや。

○教訓



拓植より

此處山間の小邑に候も、地の利を得たれば年々に繁華におもむき、以前の拓植に候はず。風森神社は名高く、夫木集には

恨みじな  
風の森なる  
さくら花  
さこそあたる  
色に咲くとも

鶯を聞きし朝友に

先日より、一度聞え上げんと存じつゝ、一日延しに致し今日に及び候も、今日と申す今日は、聞え上げねばならぬ事に相成り申し候。斯様に筆執り來らば、何事かと眼を圓くし給はんも、然う六ヶしき事には候はず、先以て御聞き願はしく候。

先日移轉の庭に古梅これ有り、二三輪花咲き居り候に移りし翌朝より鶯訪ひ來、怪しき聲にて鳴く可笑しさ。朝毎に鳴く、僕が聴くと申す風に、幾朝かを過し候に、最初をかしく、澁りて曲を成さざりしもの、數日にして

名張より

上野より南四里十四町、大和に接するに繁華地、上野の敵も申すべき町に候。名張川は、一に梁瀬川又は東川と呼ばれ候て、鴨、鷺、鮒等を産して名高く、市守宮は、随分眺めよろしく候。

赤目瀑

極めて妙に、珠を盤上に轉ばすが様に、筆舌に盡しがたき聲と相成り申し候。弟は、他の鶯と申すに、母迄が賛成して然りと答へ候も、生は矢張先日よりの鶯とするものにて、朝毎の稽古積みし結果に外ならずと信じたるに候。詞兄も亦然か思ひ給ふべく、實に勉強と申すものは恐ろしきものと存じ候。それと同時に、吾が學の進まざる事に心づけば、小鳥にも恥かしく、一層奮勵せんと覺悟致し候。何でもなき事に候へども、深く感じ候ひし故、御尋ねかたぐ一寸聞え上げ候。不宜。

◎返信に曰く。谷村よりの初鶯、村より町へと旅試み先日より御庭の梅に宿占め候ひし由、事既に風流、御



東海だより

世に四十八瀧と名高く、名張の老儒鎌田梁州のものされた。観瀑圖志二巻ござ候夏は是非、一遊したきものぞ存じ候。

四日市

港灣を有し、且つ諸街道の要衝、伊勢は津でもつきの騒ぎにあらず候。實に國內に於ける一大商區、汽船は伊勢沿岸の外

神戸へも横濱へも便ござ候。

津より

此處、藤堂公の本城一名を阿濃津と申され、贊崎港を擁し居り、市坊の數八十八參宮の要衝地、綠酒紅燈、すこぶる旅愁を慰むるにも宜しき處に御座候。

○ 城址は、市街の南方

東海だより

○ 教訓

六十四

興の程、嘸かしの想はれ申し候、御得意の作も有るべきを、そをば御示しもなく、只々精勵すべしとの御書久しく詩も文にも遠ざかり居る小生には、極めて厳しく感じ申し候。げに御説の通り、鶯は鳴きに鳴きて稽古仕上げ、珠ころばす様なる聲を得しに候。御同然に幾年が學びし作詩作文、今以て可なりの域に達せざるは、固より稽古致し方の足らざるに候。吳々も君と鶯とに謝し候。今日、好教訓賜はりしを。

感激と云ふ事の問題に

◎來信に曰く。世に能く感激と申し候が、何事にも經

験乏しき小弟等には解しかね候處、御序の時分、やさしう御教へ下され間敷や。常に、感激は成功の基と申す儀、耳にする語に候ゆる、斯の如くに御座候。

御尋ね承知。感激は實にも成功の基にござ候。小野道風の蛙に於ける、太田道灌の山吹の歌に於ける、共に一感激の下に成功したるものと申すべく候。又、細川幽齋と申す人は、少うして武事に偏し、和歌は公卿婦女子の學ぶの技、武夫のする事に非すと申されしに候。然るに、偶或地の合戦に際し、一騎の敵その馬を棄て、逃れたるが有りしに候。其時の從士申すに、馬背尙温み冷めず、敵は未だ遠くは行くまじと申しつゝ、古歌に

○ 教訓

六十五



に之れ有り、岩田、阿濃の二川を帯び居り、伊勢内海の要衝に御座候。本丸西丸は、石壁のみ存し居り、東丸は老樹蔚然として堀遠り、蓮花多く候。有造館址は此に有之候。これは文政中文武を奨励せし名残に候。

今日は公園に遊び申し候。地は阿濃川に

臨むの一丘陵、耕省臺、衆觀亭の眺めは山色海光を双眸に入れ得、仲々詩情を動すに足るに候。もさ藤堂公の別墅、四時の花卉にも贅しからず候。高山神社は、丘の東隅に之れ有り、藩祖藤堂高虎の靈を祀れるに候。

阿漕の浦さは、今し賢崎港と呼ぶる、海

君はまだ遠くは行かじ我が袖の

たもとの涙ひえしはてねば  
どの一首を引きしに候。幽齋げにもと感じ、即ち馳せて其敵を捕へて還りし例もござ候ひき、此事ありし以來、幽齋は始めて歌道の武事に益ある事を悟り、心を文事に寄せ、遂に國風の奥儀を窮むるに至りしに候。幽齋は後の號に之れ有り、當時は兵部太輔藤孝と申せしに候。忠興の爲には、父にて候。此事は、今古史談にも見え居るにて、大抵の人は知れる事蹟にござ候。感激は、誰にも有る事に候も、其の時にのみに止まるにより、成功せざるに候。前に示せる鶯の事も、矢張感激の一に候ぞ。

尚、人に問ふを恥ぢぬは宜しき事、問うて返事の様に行はざるは悪しく候。知らぬを知れる様に粧ふ、極めて悪しき事にて、甚しき恥かく事有るものに候へば、何事にも御尋ね然るべく、存じ居る物事は答ふるに吝なるまじく、知らざる事は人にも問ひて相當の御返事すべく、尚知れざる時分には、有の儘を答へ申すべく候。不盡。

友に自ら振はしむ

氣は發達の要素にござ候。氣なくんば、凡百の事皆成らざるものに御座候。困じて氣益壯に、窮して氣益振ふもの、能く大事を成就すべく候。才智も氣なくんば伸



の稱、津市の東一面の事にて、禁を破れる平次の事は、誰も知る處に候。濱へは松まげらに砂白く、風光繪の如く候。

宇治山田よ

り一筆

大神宮へ參詣、隅から隅まで探り、二見浦に宿り申し候。此にて日記は大分肥え申すべく候も、詩筆

びぬものに之れ有り、才智をして靈活ならしむるは、皆氣の致す處に御座候。文章も氣なくんば光燄なく、如何に其文字の排置、巧妙なればとて、錦繡の語を著けたればとて、毫も人を感動せしむるものに之れなく、恰も造花に異ならず候。古人が、字々紙上に立つと申せるは、只氣あるを以ての故にござ候。氣あらば、文字整はずとも、生氣自ら流動致し、筆舞ひ紙躍るの妙これ有り申すべく候。豈に事業の上のみに、氣を尙ばんやと申したく候。斯様に申せば、何事にも氣を振はすの要ある、御合點まゐりし事と存じ候。逆境に陥りて、志の萎縮するも氣なきが爲に候。順境に處して進取せざるも、亦氣なき

なきに困じ、杯のみ重り申し居り候。歸宅までには、少しは作るべき心得、忘れぬ處御ほめ願はしく候。

鳥羽より

その繁華、伊勢海沿岸に稀に見る所、古來長港の名を博し、帆檣林立の盛況を呈し居り、微絃低唱、風流ならずとせ

が爲に候。草木も氣あれば繁茂し、氣絶ゆれば枯死す、人も亦之と同様に御座候

古人曰く、陽氣發する所、金石亦透る、精神一到、何事か成らざらんと。むかし、李將軍石を見誤りて、虎と思ひて之を射候に、矢その石に透りしに候、のち其石なる事を知りて、幾回か之を射候ひしも、再び透らざりしとの事に候。又、仁徳帝の十二年秋七月、高麗より幾百斤の重さなる、鐵の盾と鐵の的とを献せし時、戸田宿禰、勅を受け、弓箭を持ちて朝堂の庭に立ち、射損じもせば國の恥辱と、一身の氣力を箭先にこめ候ひて、鐵はおろかの事よ、磐石をも射透さで置くべきかと、豫め立てら



東海だより

す、此處は、稻垣氏の舊城下に候。

○ 今日、日和山に登り、青松の間に隱見する白帆、諸島嶼の畫に入るも、ほしいまゝに致し候。蕉翁の句碑あり、

鷹一つ見つけて嬉し伊良湖崎さの十七字詩を刻するもの、以て眺め如何を知らるべく候。

松阪より

紀州のさび領地、交通至便の商區に候。公園は申すまでもなく、舊城址、土地高燥に之れ有り、遠近の山光波影を掌上に弄さるゝに候。詩によきは、十景の選あるにも知られ候はん

○ 山室神社は、國學中興の祖本居宣長翁を

東海だより

○ 教訓

七十

れし彼の鐵的に向ひ、弓を満月の如くに引絞り候て、矢頃見計らひて放ち候ひしに、射誤まらばこそ、箭は美事に鐵的に命中し、而も半はその裏に見はれしに候。さらば、盾をも仕るべしとて、二の箭も難なく、前の如くに射透したりとの事に候。其鐵を穿ち、其石を穿ち候ひしは、抑も箭には之れなく、兩ながら氣の透りしに外ならざるに候。能く御合點まゐりし事と存じ候。

是に於て乎、人は氣を尙ぶに候。人にして氣なくんば又何をか成就し得申すべき。而も氣は年の長幼に關せざるものに御座候。此氣や、死地を生に回し、逆境を順境に轉じ得べく候。氣衰ふれば、即ち人間萬事休すと申す

べく候。君動もすれば薄志弱行、氣の一字を忘れ給ふもの、如し。故に怒りを招くを恐れず、斯くは一書を呈せる次第、何糞と云ふ勇氣、腹の底より起させ給ふべく候。若し心弱くなり給は、李將軍の石や、戸田宿禰の鐵の事繰返して、自身に鞭加へられ度候。再拜

○ 返信に曰く。貴重の時間に執り給ひし御筆、一しほ有難く拜見仕り候。御示しの事、如何にも能く會得まあり申し候。自身には、随分氣振はし居る積りにござ候も、所謂港にて船割る如きは、油断と申すより、氣に乏しき爲かど、今更感じ申し候。今日の境遇は、最も氣のみにて行り通さるべからざるの小生、御示諭

○ 教訓

七十一



東海だより

祀れるものに之れ有り、翁は此地の人にござ候。

桑名より

米穀の取引最も盛んに行はるゝ此處、商業も亦殷賑にござ候。此處は、もさ松本氏十一萬八千石の領藩に之れ有り、海や川には、往來の帆影つきやらず候。城址は市街の東北にござ候。

○教訓

七十二

の事共、拳々服膺、いざと申す機會まゐり候はんか、進みて死地を脱し、順に向ふべく候。奉答。

意志不堅固の友へ

拜呈。何事にも能く憎まれ口叩く僕に御座候も、毫末も悪意は挟まざるに候。才學兩ながら君に下り候も、極めて友誼を重んずるものに候。すべてに於て、僕は君に敬服措かざるものに候も、只一つ僕の方君に勝り、且つ君に惜む所のもの御座候。そは他にも候はず。御意志の不堅固なる事に御座候。僕曾て、或書に見し語、手帖に扣へあり、曰く

金城より

商業としては大坂に亞ぐの名古屋、先づ金の鯨に迎へられ申し候。日本本土を人體に喩ふれば、恰も臍に相當する處に候はん。鐵道の縦横に通ずる、商工業の盛大なる、人家の稠密なる、車馬の絡繹たる、社寺輪奐の美を極めたる、大都會

東海だより

肥壤に梅を植う、花茂きも其韻古びず。沃土に竹を植う、枝盛んなるも其質堅からず。富家に生るゝの子弟、殆ど之に類するものあり。

と。名言と申すべく、寫して君に御示し致し候。僅かに數十字、讀みて何と感給ひし乎。古人は、實に巧みに言ふもの哉、とのみにては、眞に讀み給ひしと申すものに非ず。僕は其眞偽を、御行爲に於て知らんとするものに御座候。

君は所謂千金の子、語に既に堂に垂せずと有る様に、自ら愛し給ふも宜しく、愛するは自重と申す事にも相成るべく候も、此を以て意志の堅固とは爲し難く候。貧賤

○教訓

七十三



の名に恥ぢずと申すべく候。

○金の鏡は、朝日に夕日に輝き、内外人の目をおどろかす此地第一の名物、仰ぐ五層の天守閣に之を見らる候。その高さは八尺五寸、胴のまはりは七尺三寸、黄金一千九百四十枚を漬したるもの、由、汽車よりも見られ候。

に生れしもの、意志堅固なるに限らず。また富家に生れし人必ずしも不堅固に限らず候。意志薄弱の人は、萬事に敗れ易く、遂には其存在さへ見難く相成るものに御座候。人の一代は長くて七八十年に過ぎず候も、一事業さへ此世に遺さば。千古の後まで死せざるべく候。方針立たぬと云ふも、再舉出来ぬと云ふも、中絶するも、逆境より脱し得ざるも、進取の氣に乏しきも、自ら満足と思ふも、皆之れ意志不堅固を意味するかと存じ候。病魔も意強く志張りし人には犯し得ず候。病も氣からとは、實に能く申せし諺に候はずや。將來君が従事せられんとする御營業、最も斗大の膽をも要し、鐵石の意志をも要する

○

一日にかけすり廻り市内の見物すまし候も、一々御通信致し難く候へば、歸宅するまで御預け願はしく候。草々。

鳴海より

も海道の一驛に之れ有り、鳴海しぼりは今も著名にごさ候。むかしは鳴海濁、宵月の濱なご稱せられ

東海だより

事に候。君にして、能く御父祖の業繼ぎ給はんとなら、學生の今より、膽を鍊り給へ、意志を鐵石に比し給へ、黄金は事業を助くるに過ぎず、意志が基礎なるに候。其内拜顔もせば、例により開陳すべく候。敬具。  
○返信に曰く。御示しの語は、確かに醉古堂劍掃中の句と存じ候。小生自ら千金の子を以て居らず候も、缺點の志の弱きに在ること、夙に承知。日夜修養中なるに御座候。今日しも尊書に接し、更に得る所多く、今より瘠地に植ゑられし梅と竹とを以て自ら任じ、貴兄の言に酬ゆべく候。且つ御期待の如く、行爲に於て其實示し申すべく、寸楮を裁し貴答に代へ候。拜具。



和歌にも詠まれ候な  
所謂星移り物變り  
海へは一里許も遠ざ  
かり居るに候。

○ 蕉翁が、

星崎の

闇をみよこや

鳴く千鳥

さの句碑建つ、千鳥  
塚は、山玉山に之れ  
有り候。山上の眺め  
は極めてよく、峰巒  
に海洋に、我有にせ

られ申し候。

○

急がね旅にも候はれ  
ど、笠寺觀音へも  
呼續地藏へも、迂  
回してまゐり申し  
候。紹巴の句に、

呼つぎの

濱べや霧に

わたし舟

熱田より

伊勢大廟に亞ぐの大  
社、しるすも畏けれ

東海だより

### 何か返事乞ひし弟に

○ 來信に曰く。花の頃は、しげく御書參り、知らぬ  
嵐山や東山の春げしき、面白う拜見致し、繪葉書など  
と見比べ、其夜は夢に遊びし事さへ有りしに候よ。村  
の此頃は静かに、紅き物は娘のリボンにも見難く、笠  
の紐まで淺黄に代へられし初夏、目も覺めん計りの景  
色に御座候。京は又格別なるべしなど、父上様のおほ  
せ、御手透の時分にさらくと、御便下されまじく候  
や。繪ならば、最も妙にて嬉しう存するものに候。二  
つとも叶はずば、何なりとも願ひ上げ候。再拜。

能く廻りし筆、稽古と申すものは恐ろしいものです。此  
上、勉強なさるゝ様に願ふは、此兄ばかりでは有ります  
まい。時に清ちやん、お望み通りに御便しませう。それ  
も初夏の景色は後にして、京より筆でお話をして見ませ  
う。見るよりも、能く聞いて貰はねばなりませんよ。

お日様は晝に輝き、お月様は夜に照るでせう。その東  
に出で、西に入る事は、昔も今も一つも變らず、決し  
て怠りはなさらぬのです。時に彼の雷ですが、時に  
は能く鳴り、時には隠れ、少しもきまりが有りません  
私に言はせると、不勉強ものです。

或年の事、お日様とお月様に雷と約束が出来て、

○ 教訓



ご祭神五座、攝社末社の數知らず候。神境の内外には、名蹟散在、古人の詠まれし和歌も多く候。

八事山より

此處、興正律寺遍照院の所在地、弘法大師の開基に之れ有り。東西に別れ居り候。總本尊を大日如来とし、東山の本尊は馬頭觀音西山の本

世界漫遊をやりました。お日様は、いつも夜明に宿をお立ちになり、夕暮には必ず御泊になるのです。お月様は、夕暮にお立ちになり、夜明には御憩になるのです。雷は固より不勉強者ですから、其時々の氣分次第、夜旅するかと思ふと寝たり、晝旅するかと思ふと又寝たり。いつも後れて、お日様やお月様と共に行事が出来ませんでした。其處で、雷公が歎息して言ひますには、日月の去る、何ぞ夫れ疾きやと。此お話、よく判りました乎。光陰矢の如しと申す語を、斯う面白く云ひ代へたので、此世の中には、今お話した雷の如き人が多い、雷となつては成りませんぞ。

分際と云ふ事につき

拜啓。分際と申す事は、何人も守るべきものに之れ有り候。身の貴賤に従ひ、分に甲乙生じ候はんも、自ら檢束すべきは同様なるに候。天を仰げば、其高さ知り難く、地に俯すれば、其厚さ測るべからず候。吾々は其中間に處し、利に營々とし、名に汲々とし、死に至るまでも名利に飽くことを知らず、憐むべきもの、様に候も、天下誰か名利を好まざるもの之れ有るべき。それを好まずと申すものは、恐らくは常識缺ける人に候はん、只人は其分際を越えざる様に致し度ものにて、そも七八分に止めお

尊は聖觀音にごさ候俗に尾張と申され、古は女子の東山に登るを禁じたる靈場にごさ候、大日堂前に立てば、東南にかけての山海を我有にすべく、詩景限りなく候。又、天道山あり名古屋より士女來遊する處。眺めは、八事山に劣らず候。此處に、臨濟宗の高照寺ごさ候。



岡崎より

此處は實に徳川氏の根據地、東海道中屈指の都會に之れ有り、愛知縣下にては、名古屋、熱田に亞き居るに候。南に太平洋西に矢矧川あり、水陸運漕に富み居るの候。關原役後は本多氏の邑となり、龍城神社は、忠勝を祀れるものに候。

豊橋より

岡崎は西端、こゝは東端に在る國の二都會、もこ吉田と稱し東海道の一驛、頗る繁華の市街に之れ有り、伊勢の神社港と汽船往來し、海陸共に交通便利の地にござ候。吉田神社と悟懐寺は有名に候。

豊川稻荷

東海だより

き度候。

書生は書生、學者は學者、商賈は商賈の分際を守るべく、其他世に處する人々は、皆その覺悟なくは叶はぬ事共に候。併し、分を守ると、満足とは自ら別物にござ候。同義と誤解あるまじく候。満足は自負にして、自負は身を亡ぼすの基、分さへ守らば自ら足る事を知りもし又知らるゝものに御座候。

花の半開に於ける、酒の微醉に於ける、其賞すべく其喜ぶべきは、常に十分ならざる處に存するものに御座候。すべて事の七八分なるは、十分なると同一に之れ有り、既に十分なれば、それ以上を貪るまじきものに候。得ん

ことを貪るものは、身富むも心貧しく候も、足るを知るものは、身貧しきも心は即ち富み居るものに御座候。故に盈滿に居るものと雖も、水の將に溢れんとし、未だ溢れざるが様に、切に再び一滴を加ふるを忌むに候。忌むとは、俗に申す嫌ふ事に候。

古人は既に、勢は倚り盡すべからず、言は道ひ盡すべからず、福は享け盡すべからず、凡そ事は不盡の處に、意味偏に長し、と申されしに候。たゞ學のみは、天の高く、地の厚きが様に、其窮極を知り難きに候。人にして苟くも満足の念生じもせば、明牕淨机、香を焚いて書を讀むが宜しく候。俗に申すぶると二字は、動もすると分を



稻荷と申せば、すぐ豊川さ人の口の上るが此處、所在地は妙嚴寺の境内にして、祭れるは咤呾尼天に之れ有り、稻荷の本體に非ざる由に候。何にも致せ、美しき堂宇、朝夕に參詣者引きもきらす候。

○ 妙嚴院は禪宗、堂宇は輪奐の美をつくし居り、稻荷と共に世

に知られ、庭園の古雅なる、人をして自然の山水に接するの感あらしめ申すに候

### 石卷山

絶頂は風光に富むの山、林鶴、梁翁の文に三河に奇山なし、唯一の石卷山あるのみと物されしは此處脚下には瀆名湖、東北には富士、西南には渥美灣を望まれ申

破り易く、何處へ迄もらしくしたきものに御座候。斯様に君に申せば、何か譯有る様に聞え候はんも、然る儀には非ず候。先日も分際論出で候に付、重ねて筆にしたるに過ぎ申さるに候。併し、君は富豪の子弟、嚴しき眼より見ば、分際越えし點も有るべく候。未來の御財産の上よりすれば、黄金の靴穿ち給ふも尙不足として宜しかるべきも、今は學生の御身と申す事、必ず御忘れ成され間敷、最後に一筆書き加へ申し候。不盡。

○ 返信に曰く。御書有難く、決して普通の友の筆として見申さず、一の教訓書として熟讀仕り候。小生、自ら豪商の子弟を以て居らず。又、數十萬金の家に生れ

候とも、固より豪商の子弟を以て居るべきに非ず。往々悪友に誤まれんと致し候も、書物讀みし御蔭に決して惑はれ申さず、之も君が平素の御説に基づくものと感佩罷在り候。君と相交はるの初め、極めて難かりしも、而も今日の情誼ある、眞に友を重んずるものと申すべく候。

友を重んずるものは、交はるの時極めて難く候も、一たび交を結ぶや、其堅きこと金石の如く、生死相共にし、歡苦相同じくするが常にござ候。之に反して友を輕んずるものは、交はるの時極めて易く候も、生を共にして死を同じくせず、歡を語るべきも苦を談す



すに候。

潮見阪にて

軒餘曲折、登り六町餘、見渡せば茫々たる太平洋、七十五里の遠州灘は脚下に横ふに候。東には雪の富士、西には尾參の連山淡く濃く、詩胸を快ならしめ申し候又、潮見觀音ござ候

濱名湖にて

往昔は猪牙湖と申されしに候。明應八年の海嘯に、潮口崩れて裏海と相成り、其口を今切と申され、東に舞阪町、西に新井町之れ有り、相通するには、長板橋を架せられ居り候。湖は東西二里、南北二里二十五町、朝霞夕烟の眺めに宜しく候

濱松より

東海だより

○教訓

べからず候。剩さへ、朝に交はりて夕には仇敵の情をなすに候が。其初め交を納るゝもの、利を以てしたるが故に候。交を結ぶものも、亦利を以てしたるが故に候。その一朝にして反目する、固より當然の事と申すべく候。夫れ、相交はるもの信義を以てすれば、金石の契、永く渝はらざるに候。是に於てか古人も、一心以て萬友に交はるべく、二心以て一友に交はるべからず、と申され居るに候はずや。

御末筆の事、常に心得居るに候も、此上尙注意致し申すべく候。小生は、才學人の下に候も、友の言は能く容れんと心の心に候へば、御忠告望ましく、只それに

酬い難きを恐れ居るものに御座候。草々拜答。

洋學を勸む

洋學の事、諄々と聞え上ぐる要も之れなく、貴兄とて等閑に附せられ居るまじく候も、僕は手短に、妙齡にして視力強き中に、細字の洋書ごしく、讀破し給へと申すものに御座候。此學深く修めおき給はずば、世に立ち給ひし曉、萬事同じ業の人々に後れ易きのみ候はず、自らも大なる不都合感せらるゝ事に候はん。右は、今日不圖心に浮び、それとはなしに筆に上せる次第、殊更呈せる書には非ず、御覽なされずとも不足申す間敷候。

○教訓



東海だより

井上氏舊城下、海道中にては静岡、小田原、豊橋等と繁華に於て甲乙なきの地に候。元祿の頃は徳川家康の配下に屬し、のち堀尾吉晴、松平忠頼、徳川頼宣、元和四年には、高力忠房氏の據りし處、城内の東照宮と、大手先の諏訪神社とは、郡内の名祠。舊城址は、眺望よろしく候

引佐の細江

濱名湖の支湖に之れ有り、江口は狭く、一帯の長流二十餘町實に名實相副ふに候が、兩岸には怪石老松互に景致を添へ納涼と觀月とに宜しく、風光の美は遠州第一と申さるゝに候

井伊谷の宮

宗良親王を祭れる宮

東海だより

○教訓

八十六

○返信に曰く。洋書學べよとの御忠告、鐵槌頭上てつづめづじやうに下りしよりも、尙なほ厳しく感じ申し候。殊ことに視力衰へぬ若き中にとは、何たる警語ぞ、恐入り申し候。小生は何れかと申せば、つまらぬ漢籍かんせきに心潜め、動もすれば原書の方、御留守おるすに成る事多く、御書に接して深く其非を悟り申し候。將來は、工學士たらんとする僕、一しほ尊意そんいの在る所を領し候へば、即日實行致し候。詩書の如き、文集ぶんしふの如き、業成りて後、精神慰藉せいしんけいしゃくとして讀むも遅かるまじく候。而も一通りの事は、父より學びし漢籍専門的に研究するの要なく、是迄は全く小生の道樂だうらくなりしに心づき申し候。勿々奉復。

千里同風の四字につき

◎來信に曰く。千里同風とは、能く正月の賀狀がじやうに書く句に候が、貴兄きけいその出處しゅつしよ御承知おついでに候は、御序おついでの時分御知らせ下され度、且つ意味は何と解して宜しかるべき、聊か迷ひしは風の字じに之れ有り、吹く風か、風俗の風か、何れかと申す點てんにござ候。草々。

御尋ね敬承。御同様常ごさうやうつねに用る居る文句もんくに、いざと申す場合あひには、正當せいとうの解かいを施ほこし難きもの多く候が、是等これらは皆知れる顔かほにて通し居るものにて、苟も學まなに志こころざしす者の取らざる所ところに御座候。さて、千里同風せんりどうふうの四字よじは、論衡ろんかうに見

○教訓

八十七



東海だより

幣中社、御陵は祠背に御座候。社地は山を賁ひ、濱名湖に俯し、佳景は神靈を慰め奉るに足るべく候

見付

東海道の一驛、商戸軒を並べ、別に花街もござ候。見附臺も申す高見は、富士を望むによるしき故の名、詠歌も亦少なからず候。

○教訓

八十八

え居り候。義は、天地の間、到る處同一の風が吹くと申す事にて、太平の世と申す事の喩に候。其句に、

千里不同風 百里不共雷

と之れ有り候へば、前解にて宜しかるべく候。又、何處も同じき風俗とにて、我が大君の春を祝する元日と解しても、通らぬものにも有るまじと存じ候も、何れに致しても目出度事、深く詮議せずとも濟む事に候はん。昔の漢學者などは、是等の是非などに議論を戦はすが常に御座候も、斯様な事に貴重なる時間費す故、漢學は融通利かぬなど、俗人に悪口せらるゝかと存じ候。僕も漢籍はすきに候も、少し變則に御座候。呵々。

掛川

五十三亭の一、古の面目を維持して繁華に候。城址は北端に之れ有り、もさ今川氏眞が據りし處に候

小夜中山

日阪より金谷へ越ゆる阪路の稱、古來名高く、路險阻にして左右は深谷、恰も屏屏の峰を歩するに異

東海だより

碁を詩に代へよと勸告す

碁將棋は、親の死ぬ間にも合はず、と其耽りて夢中になり易きを戒しめ、詩作るよりも田作れど、是は又、動もすれば世に後れて衣食に益なきを嘲りし語。何れも其實を穿ち得て、最も妙なる俗語に之れ有り候。此二つ、趣味の點より申せば深淺なく、技に上手下手の別これ有り候も、亦趣味に甲乙なきものに御座候。君は既に碁客、御鼻も自ら高く候も、僕より見れば非なるもの數多これ有り候。敵なくば出來さる事、是れ其一に御座候。耽りて徹夜などに及ぶ事、是れ其二に御座

○教訓

八十九



なり申さず候。新開の路あれど、二十餘町も迂回に候。夜泣石、夜哭松、姪婦塚久圓寺ござ候。

可睡齋

有名なる禪宗に之れ有り、諸堂宇美事にござ候。俗に三尺坊と申すは、一段の高處に在る秋葉總本殿の事に之れ有り、威徳大權現を安置され

○教訓

候。終には物を賭するに至る事、是れ其三に御座候。業務の御留守になり易き事、是れ其四に御座候。行き様によりては人格を墜す事、是れ其五に御座候。

昔は、別荘賭せし詩人之れ有り候も、是は風流の事。今に典故となり居り候も、二あるべからざる事に御座候。もと圍碁は、消閑の具として悪き遊戯にも之れなく、仙人も英雄も一局面に、己が心事を描きし例も有るべく候も、現在の貴兄にして此技に心寄せらるゝは、僕甚だ悪しとするものに御座候。天下第一の名手とならるゝ、保険付かば兎も角もの事にござ候。貴兄にして若し、天下の名手たらん事を夢み給はゞ、僕が大關を願ふより遙かに

居るに候。

金谷にて

大井川の西岸に位する一驛、東には大井川の鐵橋これ有り、長さ三千三百三十九尺。西には牧野原のトンネルあり、長さ三千二百七十三尺と聞き申し候。

○ 宗行卿の東下に名高き菊川の里は、

○教訓

覺束なき事と斷言致すを憚らず候。私かに想ふに、君は趣味に重きを置かるゝものゝ如し。故に尙更に御斷念勸告するものに御座候。願くは、圍碁を抛ちて作詩に代へ給へ。僕、少し詩趣を解すればとて、水を我田に引く譯には非ず候。彼の田作るより損か得かは知らず候も、圍碁よりも益多く候。其益も、貴兄の御立場より申して御參考に供すべく候。第一、敵なきも樂しまるゝ事に御座候。第二、自然に獨學出來て物事を知り得る事に御座候。第三、書畫の鑑識上に力を増す事に御座候。第四、精神慰藉の料に供せらるゝ事に御座候。第五、人格を高むる事



金谷町の大字に之れ有り、多情の詩人は今に尙旅衣をうるほし申すべく候。

静岡より

中世に國府を置かれ府中又は駿府と申されし此處、市街は舊城の四方を繞り、北には賤機山時に、淺間神社鎮す。西には安部川流れ、清水港は東方三里餘の處に

に御座候。碁に於ける五つと、御比へ願はしく候。稍その趣味を解する迄は、幾分か飽き参り候も、それも少しの御辛抱、貴兄の御才學ならば、直に相當の域に進ませらるべく候。没字碑の貴兄ならば、僕何しに此言有るべき。その成功するを豫知するにより、わざ／＼筆執りし次第に候。貴兄の性として飲を解せず、僕は能く飲む。その能くせざるものに、酒を強ひば非は僕に之れ有り候も、今日申す所の作詩の如きは、貴兄にして能く果し得べければなり。況して圍碁にまされる益多き事に候をや。何卒、よく御勘考願はしく、吳々も事好みて聞え上げしに非ず、繰返し御覽下され度候。再拜。

候。申す迄もなく東海道中屈指の都會。

○ 舊城は追手町の北に候。當時武威を示せる七層の天守閣は寛永十二年の火災に焼けて影を留めず。大蘇鐵の四株あるは琉球より貢ぐ物と云ひ、奇觀にごさ候。又、下魚町の寶臺院は、浄土宗にして結構莊嚴にごさ候。

○ 返信に曰く。碁を詩に代へよとの御忠告、生に取り

ては實に知己の言、感謝の至りに候。圍碁と申しても評判程に耽るに非ず候も、人の口は兎角輪に輪をかけ易く、君が酒に於けると同様に、迷惑少なからず候。斯やうに申すと、事を左右に托し、自分の罪隠す様にごさ候も、圍碁の處世に防害する事は、既に十分に認め居る次第にごさ候。又、御示しの二者の損得、且つ趣味に甲乙や深淺なき儀も、よく相判り申し候。作詩は、全然生に不可能の技に非すと申さず候も、如何にしても平仄より覚え初むる氣に成り難く、その趣味解する迄の道中、とても／＼も辛抱出來得べくも有らず



○ 賤機山は、古名を青葉が岡と申し、山上には今川義元の古城址ござ候。山の南は静岡にして、その麓には淺間神社ござ候。又、北の山裾には鯨池ござ候。江尻川の水源に候。山はみな青松にして、吹く風は小琴の音を絶たす眺めも亦よろしき處に候。

○ 焼津より

史にも明かなる日本武尊の御遺跡、焼津神社も之れ有り、尊も奉祀し居るに候。海邊は水清く、東に駿河灣鏡を磨し、伊豆の峰巒は烟波を隔て、望むべく、富士は北に中天を支へ居るなど、仲々得やすからぬ景色、海水浴と月見によく候。

候。殊に朝夕俗にたづさはる身、常に筆硯に御従事の君と同日の論にござなく候。尤も、俗事に従ふ程、詩趣の必要ある事は、毎度高見耳にする處に之れ有り候へば、心を高尚なり、俗を破る爲には、折々唐人の詩などに目晒し居る儀に御座候。御書に見ゆる如く、甘黨を辛黨に引入るゝが如き、不可能の事強ひつゝとは存じ申さず候も、釣好に銃持て位には聞え申すべき乎と私かに思ひ居り候。さればとて、御教示を聴かぬと申すには非ず、作詩に従ふを受けざるのみにて、詩集一しほ熱心に讀み申すべく、パチ／＼と打つ烏鷺の合戦は、耽らぬ様に致すべく、御安心あれ。

遊學希望の友を諭す

◎ 來信に曰く。一別既に久しく、幾度か花は開落し、幾度か月は盈虧し、相思のみ轉切なるに候處、學兄には益御勉強の事と存じ候。指折れば、相見ざることは殆ど五年、只妙じき御筆下さるゝにより、千里を隔て居り候ても、猶御面會するが如くに感せられ申すに候。小弟には、此度漸く中學卒業致し候に付、更に歩進めんと存じ、御地へ遊學思ひ立ち申し候。御意見如何、無遠慮に御聞かせ願はしく候。幸にも兩親共に健全に之れ有り、學資も少々はござ候に付、大學までもと期



久能山

もさ久能寺の有りし處、今は別格官幣社久能神社ござ候。徳川家康を祀れるものに之れ有り、元和三年にその遺骸を葬れる舊地。日光山には後世に移せしに候。靈廟は金門の裡に之れ有り、燦然として人の眼を射るに候。眺め亦宜しく候。

三保より

白砂青松の地約一里名高き羽衣の松もござ候。その高さ八丈餘、幹圍は一丈餘、樹下には碑ござ候。松林中には、三保神社ござ候。鬼貫の匂に、

春風や三保の松原  
せいけん寺

興津より

東海だより

し居り候。何れ入らば、第一高等學校に之れ有り候。學科は父も弟も、工科修めんどの希望。性質よりするも、國元の事情よりするも、適當かと存じ居り候。そのむかし、小學御同窓の時分は、文學士願ひ居り候ひしも可笑しく候。學兄には、御尊父様のやうに名判官たらん事望ませられ、法學の方かと存じ候。此書御落次第、何卒御返事下され度候。草々敬具。精しく御認めのお雲拜見。正月待ち長う思ひしは、すと昔のいろは時代、此四五年は、げにも流るゝが如く感ぜらるゝ光陰、君に別れて五年近う成りしに驚き、中學御卒業との事に接しては、目出度祝ひ上ぐると共に、年

取りしこと今更の様に心づき申し候。御兩親様には、御機嫌宜しき由、賀し奉り候。

さて、君には御遊學として、此處なる東京へ向ひ給はんとや。御立志は、極めて嘉すべき儀に御座候も、僕は容易に御同意仕り難く、御父上様には、何の苦もなく御承引遊ばされ候ひしか、先以て此事伺ひ上げた候。御書参りしからは、御承引の事疑ふまじく候も、此地へ來給ふこと、斷じて宜しからず候。僕が東京の土踏むに至りしは、父が轉任したれば是非なく候。御地の學校去るに至りしも、亦その轉任の爲なりしに候。將來の工學士よし、更に博士の學位授かり給はん事、今より祈り居る



東海道の一驛、且つ甲州への別街道、身延山へは十三里にて候。海へを清見湯と申し、古來の勝區、清見寺もござ候。寺は三保の松原を眼下に、富士、龍爪、愛鷹の山々を畫中に見るに異ならず候。又鯛は名物。

田子浦より

此處も著明の勝區、

ものに御座候。僕は、依然のやうに法學に志し居り候へば、共に途を異にするも、成功を同じく致し度候。高等學校は、御國近き熊本然るべく、御都合悪しくは鹿兒島のもの然るべく、其地方の便を計りて設けられしも、君方の在るを以てに候はずや。右二校には、東京の子弟入學せしものも御座候。こは申す迄もなく、學生の風儀を慕うての事に候はん。殊に東京に比すれば、物價も廉に、他より侵さる、弊風も有るまじく、何も遠き東京へ御遊學に及ばずと存じ候。何れかの學校へ御入學の上、少し年経ば是非とも大學にて相會すべく、隨分御精勵あらまほしく、意見を具し御返事仕り候。

元日慶賀由來を答ふ

○來信に曰く。毎度御教示有難く、昨日新年宴會席上にて、種々談話の末、元日慶賀の由來は如何にどの問題出で候。右は皇朝にても支那にても、現に之れ有る事にござ候も、其始まりし年代をも由來をも判らず、彼の物識と自稱する先生も是には閉口致され候。支那は、文物最も早く開けし國、制度何かも我邦に輸入したれば、彼の地の俗を學びし事と存じ候處、御序の時分、是非の事共御聞かせ下され間敷や、相伺ひ候。御問ひの元日慶賀の儀、支那にては、漢の高祖に始まり

西に三保の松原を土佐繪のやうに見、北には富士の秀麗を望み候て、飽かぬ景色にござ候。東の海へには要石あり、高潮の時も、海水は此石以北に來ずと申すに候。頓阿法師の詠にたこの浦や富士のたかれの影見えて波もひさつに降れる白雪



沼津より

此處や氣候和暖、空氣清新、海べは風光に富み居り、世に千本松原と申され居るに候。舊城址は、今の本町、上地、三枚橋と申す處、初め今川義元の築きしものに之れ有り、當時は三枚橋、又は觀潮城と申されしにて、安永の頃は水野忠友居

しに候。杜氏通典には、漢の高帝、十月に秦を定め、遂に歳首とし、七年に長樂宮成り、群臣朝賀の儀を制す。と見え居り候。書言故事にも、亦之を引き居るに候。我が朝にては、神武天皇の御宇に始まれるに候。日本記 神武天皇紀に曰く、辛酉の年、春正月庚辰朔、天皇位に橿原の宮に即く是を元年と爲す云云。と之れ有り候。又、舊事紀には、神武天皇元年に、皇子大夫連伴造國造を率ゐて、賀正朝拜す。凡そ厥の即位賀正建都踐祚等の事、並に此

りしに候。

甲府より

山國の大都會、各地に通ずるの道路主たるもの六條、國産の生絲、繭の取引最も盛んに候。城址は、市街の北に訪ふべく候。旅の疲れを慰するには三藤温泉に如かざるに候。

時に發す。

と、彼是れ考へ見候へば、神武天皇御東征あらせられて、天下を平げ給ひ、然る後、元日を以て位に即き給ひ、萬世 帝業の基を肇められ、此に初めて朝賀の儀起りし事と存せられ候。

我國元日慶賀の典は、支那の儀を學ばれしには非ず候。神武天皇の元年は、支那周の惠王の十七年に當り、惠王は漢の世に先だつこと四百六十餘年に候へばなり。故に我國は我國にて制定されたるものに御座候。斯の如き事の詮議は、極めて有益にして且つ趣味深きもの、外に何なりとも御尋ね然るべく、調べて御答仕るべく候。

猿橋

東海だより



農と商と五分／＼の一驛、桂川に架する猿橋は名高く候。土人は、驛をエンケウと申し、橋をサルバシと申し、二者の區別立て居り候。

○猿橋は長さ十七間、幅三間、一支柱を用ゐず候。岸は高く、水は雪を碎き、俯すれば膽先づ寒きを覺え申すに候。

○十餘町にて、大月橋ござ候。是も桂川に架れる洋風の木橋、古雅には乏しきも名高く、長さ三十四間幅は三間に候。

身延より

日蓮宗の總本山久遠寺の所在地は此處。寺の爲に一市街を成し居り、石段も數多く、堂宇は一々擧ぐ

東海だより

投機業に耽る友に

投機と申す二字、極めて氣の利きし様な熟語に之れ有り候も、語を代へて申しもせば、やまこ、賭博、乗るか反るか即ち一六勝負となるべく、極めて不正實の業と云ふを憚らず、少し信用重んずる人は、顧みもせぬ業體のものに御座候。況して、大阪にても名家に生れし貴兄、斯る危き業に指染め給ふは、父祖の御面目を汚すと申すものにて、御位牌にも相濟むまじく候。  
先年來御不運續かせられ、御經營の事業は頓挫し、他の債務まで御責任負はせられ、踏まれ叩かれと申す御境

遇に在らせらるゝ事、うすく承知せぬにも非ず候も、眞の男兒の價値は、常に斯様なる處にて見はるゝものに之れ有り候。されば、一しほ御志操堅固に成され、衝かれても動かさず、山崩れ來ても騒かざる御態度こそ望ましきものを、損の埋合せ成されんとて、人々に隠れ忍びしでの投機業へ御勉強、他に御同情を表する事あるも、是のみに反對する僕にござ候。

御財産盡くればとて、名家の跡絶えもせず、汚れもせず、只長者番附より除かるゝ迄に御座候も、投機業なごへ手を出し給はゞ、それこそ大變、うしろ指差すもの相殖え申すべく候。人は見貧しきも心富むが第一にて、床



東海だより

るに堪えず、奥院は絶頂にして、本堂より上り五十町に候。その眺望は、山海を一眸に收め、詩氣は平素に百倍致し候。

七面山

海拔五千百五十七尺の高山、山上には七面大明神、喜見城、池大神等之れ有り、登路は羽衣橋を渡り一の鳥居より五十町

右には數多き峰を見るべく、左には龍ヶ鼻、三十三瀧、雨乞ヶ淵、白絲の瀧など探るべく候。身延山よりも路あり、山路四里半に候。

熱海

關東の有馬さも申すべき温泉地、しかも交通便にして繁華なるに候。山海の眺めよろしく、氣候は夏

東海だより

○教訓

しき人格も此處等に存するものに御座候。既往は何とか申し候様に、斷乎として御中止成され度、あきらめよきは又是れ眞の男子と申すべく候、此上、尙御我儘にも彼是の事之れ有り候はん乎、御親族様方の御決心も事實にあり申すべく、中學時代の御交際思ひ出で、一言御忠告申し上げ度、此書を呈したる次第、吳々も御良心に問はせられ、御反省願はしく候。再拜。

◎返信に曰く。今回の不始末、實に恥かしく、これ不徳の致す所、富は固より浮雲、不義に得たるにも之れなく、皆父祖の血とも汗とも申すべく候も、今は惜しからず斷念致し居り候。株式賣買は、全く形跡なき儀

に非ざりしも、改むれば以前の小生、相變らず御交際願はしく候。事業は凡て他に譲り、家政も十分整理の見込つき候間、餘事ながら御安心下され度候。尙、精しうは拜芝を期し候。拜酬。

友に讀書を勧む

僕筆執れば、常に人に勸告して讀書くと申す様に候も他の學科をおろそかに致し、書を讀めと勸むるにはあらず、朝寢夜遊をやめて、其時間を之に充てよと申すが主意にて候。友と雑談するをばやめて、書物上の事を語れと申すが主意にて候。途中にて繪葉書店の前に立ち、そ

○教訓



涼しく、冬は暖かに人間の別天地とも申すべく候、八景は名高く候。

下田

國の南端に位し、伊豆第一の良港、嘉永年間には、米國使節の來し港に候。諸方へ汽船便もござ候。

修善寺より

此處も温泉地、繁華

の醜美を評するをやめ、雑誌の表紙だけでも讀めよと申すが主意にて候。本式に、机に隠りて讀めと申すは、固よりの大主意に之れ有り、種類は何と申さず候も、之を道樂的にせず、志し居る學を補助する書こそ、宜しかるべくと存じ候。其才を養ひ、人格などを高むるには、偉人の行狀録、さては立志傳體のもの、詩歌集の如きも亦悪しからずと存じ候。

凡そ、人の才學を活用するは、恰も百姓が米穀を貯ふるに同じく候。米穀を豊年に貯へおかば、乃ち凶年に飢を救ふべく候。これと同様に、平素に多く讀書し、多く才を養ひおき候は、有用に際して自然に功を奏するも

のに御座候。

は熱海にゆづるも、幽靜は此地を推すべく候。しかも溪山の勝に富み、そのむかし、源頼家が幽閉せられし、修善寺もござ候。三州園は、もさ指月岡と呼ばれ、尼將軍の古蹟に候。

三島

箱根嶺にかゝらんとする一驛、商戸軒を列れ、妓樓碧瓦を接

百石の米、果して幾日を支へ申すべき乎。併し君、才學は書を讀む度に増進し、一抱に足らざる胸腹、千萬卷の書を容れ候とも、決して便々たらず、容るれば多々益辨するに候。さるを世の人美食に飢を訴へながら、未だ書に飢ゑたるを知らず候。美酒に渴を告ぐるも、未だ才に渴するを悟らざるに候。而も人を救ひ世に資するは、雷に米穀のみに候はざるよ。相變らずの屁理窟に候へども、讀書は決して無益に非ず候へば、随分御勉強然るべく、讀むことに氣進まぬ時は、表紙見るのみにても、手に執るのみにても宜しく候。



東海だより

し居り候。三島神社は名高く、曾ては伊豫の三島神社と本支を争ひ、彼が本元にも拘らず、此が勝ちしに候。

横須賀より

第一鎮守府の所在地も一の漁村、今は相模第一の繁華地に候。慶應元年には、幕府此に造船所をおき、終に本日の素を

○教訓

百八

○返信に曰く。學兄の様に、其都度人に益與ふる筆執らば、功德と申すべく候。御示しの讀書の事、實に面白く、吾々の爲には所謂頂門の一針、他日印刷の資を得候は、全文を寫して都下の學生に配付試みばやと存じ居る位にござ候。殊に、讀ますとも表紙見よ、手にだけにてても執れよとは、經驗に富まぬ人の言ひ得る事に之れなく、貴く讀まれ申し候。才學應用の比喩も亦面白く、君は此筆法を誰に學び給ひしかを知りたく思ふ僕に御座候。今の青年などは、随分に書に飢る才に渴したる方、極めて耳痛く讀み申し候。吳々も讀書に際しては、君が所謂道樂的のもの避け申すべく候。

致したるに候。

鎌倉より

源頼朝初めて覇府を開きし地、次で北條氏足利氏、二百數十年間、繁華を極めし大都會、規模も亦狭小ならず、その古蹟や何や彼や、見たりさて聞きたりさて、一日に筆に上しがたく候へば、是等は日記にて御覽願ふべく

東海だより

再び病氣の友に

○來信に曰く。骨肉も猶及び難き程、眞情こもれる御書、養生地の磯家にて幾度かおし戴き拜見仕り候。常に良醫の處方にて病魔を攻め、自然の景色にて精神を慰め候て、ものと健康體に復せよとの命、讀む毎に嬉しう存じ候。是までは随分、その方法取り候て、色々手を盡し見候も、依然たる經過に御座候故、此頃は何れも無益のしわざと存じ、命を天にまかせ居るに候。さりとして、不養生の事は致し申さず、病氣に敵せぬ様にと、逆の方法取り居る次第にござ候。何れ長からぬ

○教訓

百九



東海だより

候。江之島も同様にござ候。

途上より

七湯廻りも興ある事にて、山水の勝を筆に上したく候も、今度の旅には見合せ、又訪ふ事に致し候。

小田原より

北條早雲が開きし舊地、徳川氏の世なるや、大久保氏の領

○教訓

百十

吾が壽命、せめて何事か遺しおかんと、久しく執らざりし筆、今日も一二枚書き申し候。もと才學に乏しき小生、文なごに死せる身を傳へんと申す野心に之れなく候も、小生は小生だけの事、致しおき度希望に候。呉々も御厚意を謝する筆の下に、却て背くやうなる事に陥り候も、御ゆるし下され度候。今日も暮れ、明日も暮れ、日を経るまゝに墓地に近づく身に候も、覺悟の上の事なれば、動しも致し申さず、心は清々しく常よりも愉快に存じ居り候。斯うなると、結局病氣の神も拍子ぬけ致し、身を去るかとも存じ候。此處が、まだ命惜しき心去らぬ證據に候はん。

邑となりし此處、戸數三千に近く、なか／＼繁華にござ候。城址は西北に之れ有り、大久保神社、二宮尊徳翁を祀れる輓徳神社ござ候。又彼の石橋山は、町の西南三十餘町に候。

東京より

其はてを知らざりし野原、今は家にて其はて知られぬ大都、

東海だより

御轉地先よりの御書拜見。御病氣今に癒え給はぬ由、只々氣長う御養生願はしく候。今度の御筆は、極めて勢よく、日増しに御快氣やうに察せられ候。流石に南受けの暖かなる海村、しかも松青く砂白く、往來の帆影や點々の島々、さては鷗語濤聲、御精神養はせらるゝ上に於ては、名薬にも勝れりと見え申し候。併し君、これは君が詩趣に富み居る爲にて候。此處等は眞に、御得意の療法にて、御轉地の甲斐も有ると申すものに候も、醫藥を絶ち給ふは悪しく候。病魔め攻められよ、病魔と戦ひ給へど、前度に申したるは僕が筆曲りたるかは知らねど、要するに、御養生され度と申すに外ならざるに候。

○教訓

百十一



此處も昨今の大阪と  
同じく、鐵道の都に  
ござ候。此一週間餘  
は、友人の宿にさま  
りこみ、見物する筈  
に候も、その一々さ  
ても一枚や二枚の葉  
書には盡されず、又  
しても日記にて御覽  
をさ。草々。

浦和より

埼玉縣の所在地、長  
祿年中、澁川義鏡探

題を置きし地と傳へ  
られ、中世には中仙  
道の一驛。現今の繁  
華は、縣廳置かれし  
以後この事に候。

大宮より

官幣大社氷川神社に  
詣で候。由來本朝武  
運の守護神と言ひ傳  
へられ、日本武尊御  
東征のなり、戦勝祈  
り給うて靈驗ありし  
古社に御座候。武藏

東海だより

取りつかれ給ひしが、何御病氣にも致せ、追ひ拂ふが  
此方より逃ぐるか、何れかの方法講せずばなる間敷、死す  
るを待つは、前途有望なる君が爲に取らず候。僕も明日  
死ぬか知らず候も、構へて死をば待ち申さず候。御著述  
物に、萬古までも活きんとは、御達觀のやうに候も、是  
は矢張、死を惜しむ一つに候はん。十年活きば十年、五  
年活きば五年、それ丈の事残さんとは、能く言ふ事にご  
ざ候も、是も理窟に終るのみに候はん。僕は御養生の上  
にも御養生成され、御在世中に事業遂げ給はんを祈るも  
のに御座候。斯様に聞え上ぐれば、御病氣の藥にも成る  
まじきも御服膺なさらば毒にも成るまじき乎。

名を濫りにする友に

御著作頻々、讀書界の歡迎甚しく、洛陽の紙價をして高  
からしむる事と賀し上げ候。貴兄が御健筆なる事は、疾  
く承知し居る僕に御座候も、そは御專攻の漢學なり、歴  
史に於て認め候事にて、英語や算術や國文やには、不幸  
にも其手腕を伺ひもらし居る僕に御座候。斯様に聞え上  
ぐれば、奥齒に物の挟りし感じ御座候はんが、貴兄は他  
の請托を容れられ、往々名義を貸し給ふ由、是等は東京  
一部の文士に能く有る事との噂に御座候も、悪しからぬ  
様にて、大に悪しき事かと存じ候。



東海だより

の一宮と定められしは、聖武帝の御宇なりしに候。境内は大宮公園、古檜日なさへぎり、老杉雲を宿し、東北隅は疎松林を成し居り、四時の來遊に宜しく候。

熊谷より

大里郡内第一の都邑四通八達にして、荒川は市街の西南を流れて舟楫を通じ、

○教訓

今日の讀書界の思想は極めて幼稚に之れ有り、其書内容の是非を知るに由なく、其著者の名によりて購ふもの多く候。此處は道理至極の事にて、誰しも經驗ある次第に候。この呼吸を諳んじ居る悪徳出版業者は、奇貨と致し候て、無名の文士に筆執らしめ、而も願使して價値なき物を草せしめ、以て貴兄等の名義を借るに候。貸す借ると申す事は、異儀なき双方間の約束の様に候も、事實を割りもせば、必ず名義の賣買に之れ有るべく、即ち醜關係に御座候。

羊頭を掲げて狗肉を賣ると申す語、貴兄は御專攻の學につき、能く御承知の事と存じ候が、道義上は既に通り

上武鐵道は此地を起點とするに候。織物生絲の賣買盛んに候熊谷寺は、彼の蓮生坊が入寂の地に候。

川越より

埼玉縣下第一の都會諸街道の要衝に之れ有り、昔は關東管領山内定正の據る所に於て、太田持資も亦城きて居りしこゝ有るに候。明治の初年

東海だより

越したる問題に之れ有り、全く詐偽の行爲にござ候。誰も好みて發く間敷候も、萬一公然と相成りし曉には、御互が本尊となし居る著作権法に明文之れ有り、普通犯罪と同視せられ申すに候。此事ありては成らぬ儀に候も、多數の讀者を欺くと申す點、罪惡淺からず候。世に信用篤き御名をば、斯の如き事に御利用なされては、御人格にも拘る事、殊に御不得意の物にまでの御署名、多少心得あるものは、其實ならぬを看破するに難かる間敷、此等の人々には、害及ぼす筈もなければ、御名は忽ち落ち申すべく候。

貧書生の作に同情して名を貸し、親友の作に共同著述

○教訓



には、松平氏の居たりしに候。

### 井の頭辨天

此辨天よ、井の頭池中の小島に鎮するに候が、池は天正十六年、徳川家康その水を城中に引きてお茶の料にし、三代家光は、餘流を市民の飲用に充てられたり。即ち神田上水源に候避暑に宜しき地。

### 小金井櫻花

地は武蔵野の中央、四望平衍、西北には富士秩父の連山を望むべく、多摩川の兩岸には櫻樹列植、花時には香雲艶雪眺め白うなるに候。小金井橋畔には、櫻花碑建つに候。

### 貫井辨天

花見の序に訪ふに宜

の名義を附し抔致し、前者には多くの料金を得せしめ、後者には、其名を博せしむるが如き場合、世或は之を恕し申すべきも、而も其著作物の出来、貴兄の手に成るものと同一と見る能はずば、矢張詐偽は詐偽にて、金銭受授せぬと申すのみに候。悪徳出版業者は、すべて人の貧乏に付け込む事多く候も、筆も名も貧乏の處に眞の價値存するものにて、それを金銭に買はれぬが貴しと申すものに御座候。

斯く申し來れば、貴兄の如き大家には、一人の助手をも聘せられぬ事に相成るべく候も、是は又別問題にござ候。大部の著作の如き、固より助手を要すべく候。説明

を口授して筆執らしむるが如き、参考の點を筆寫せしむるが如き、大要を示して製圖せしむるが如き、誰か名を貸せるものと申すべき、全然貴兄の御作に屬するに候。併し、美術的に屬する文藝は、此法による能はずと存じ候。繪畫の下書をして、他に寫さしめて之に署名するは全くの偽作たるべく候。美的の記事順序を教へ、他に筆執らしめなば、之も貴兄の作とは相成るまじく候。美的の記事は、情景を表はすに優美の語を以てするが常にて、其語は其人々の腕に待たずば能はず、説明など、同視し難き故に御座候。況して、一面識もなき者の作物に、助手の論法を以てし名を貸すこと、殊に美的文字の作に名



東海だより

しく、同じ小金井村に候。夏は納涼、秋は紅葉、冬は雪に宜しき地に候。

横濱より

神戶と東西一對の開港場、その漁村の變じて大都市となれるも亦、殆ど同じき此處にごさ候。海外諸國と通商條約を結べるは、實に安政六年のむかしに候。

金澤より

武州金澤さて八景に名高く、能見堂、九覽亭など、何れも眺望に名を得し地。金澤文庫址は、必ず訪ふべきものに候。

館山より

此處、安房第一の港邑に之れ有り、雅名を鏡ヶ浦又は菱花灣と申し、その口の

東海だより

○教訓

百十八

を貸すこと、剩さへ書肆の請托を容れて名を致てする事極めて悪しき儀に御座候。新しき御説もあらば、僕は飽く迄も聞かんとするものに御座候。

◎返信に曰く。御來意の一々、汗顔の事のみ之れ有り、御厚情謝するの外ごさなく候。是迄餘儀なき事情の爲め、一二度名義貸したる事も之れ有り候ひしも、先年他に此の如き事件發生し、處罰せられし事聞きし以來、誤解と申すよりも好意却て不徳義、且つ法律に觸るゝ事をも相知れ候に付、如何なる事情の下にも、之を許さずして、専心に筆執り居り候間、御安心下され度、返すくも御厚情有難く存じ候。拜答。

### ○風流

是とて、僕が勝手に設けし部門、主として風雅なること又は俗事に關係せずして、興味多き筆を載せおく事にした。文範を示す書物ならば、何も彼も風流が、つた物を載せねばならぬが、是は僕が書いた事のある手紙を、此部門に充てはめた故、残らず揃うては居らぬ。さるかはりに、紋切形のもの少くないと信ずる。此點から云うと文範にならぬにも限らぬ。なると成らぬとは、之を公にしたる僕よりも、寧ろ讀者にありはせまい乎。さうすると、文範に成すと成さぬとは、讀者の責と云ふ事になる

○風流

百十九



東海だより

鷹の沖の島は、晴雨  
におもむきを添へ、  
なか／＼憐れに候。

富山

富山は、トミサンと  
翻まれ、夙に馬琴の  
八犬傳にて名を知ら  
れたる山、登り僅か  
に二十三町、安房に  
入りて此附近に來も  
せば、必ず登りて見

○風流

友の我郷を問ひしに答ふ

百二十

◎來信に曰く。小生が君の故郷を問はんとするは、徒らに山川の美を慕ふのみに非ず、讀みて自ら心慰せんとするに候。小生や久しく故國に背き、春雨秋風斷腸すること多く候。

夫れ、人の心に忘れんとして忘るゝ能はざるは、感觸の最も深き處に之れ有り、感觸の最も深き處は、即ち故郷にて候べし。古人の詩に、

客舍并州已十霜 歸心日夜憶咸陽  
無端更渡桑乾水 却望并州是故郷

るべき山に候。

鋸山

安房と上總とに跨れる峻嶺、保田より登行三十三町、山腹の日本寺には名利、勝蹟列擧に堪へず、詳記せば、一卷を成すべく、是も日記にて、草々。

神野寺にて

本寺は聖徳太子の草

東海だより

○風流

百二十一

と。並州却つて故郷の感ありしと云ふに過ぎず。俗に申す第二の故郷と申せしに候。望郷の念最も深きは、感觸の最も深き處に在り。その感觸の最も深きは、之を出生の地に求むるの外之れなく候。出生の地、必ずしも山水の勝、佳なりと申すに非ず。花月の情、深しと申すにも非ず。屋後に簷ゆるは、只一堆の青山のみ候も、吾が父祖の骨を埋めたる處と思へば、風に臨みて數行の涙流るゝに候。門前に流るゝは、只一掬の野水に候も、少年の時に同胞と戯れ遊びし處と思へば、懷舊の感、今日の吾をして斷腸せしめ易きに候。

花開き花落ち、月盈ち月虧け、別後春秋二十餘年の



東海だより

創にして、地は房總の最高峰たる鹿野山中に之れ有り、靈蹟奇勝多く候。寺の爲に家居する町は二區に分れ、商戸旗亭相接し、避暑の遊客殊に多く候。

○ 山中にて、眺望に富むは鳥居崎、九十九谷は云ふにや及ぶ、遠近の山海を双眸に收められ候も、終に

○ 風流

今日、思うて昔日に到れば、吾家の境遇、恍然として眼中に入るに候。屋後の青山、誰が爲にか秀で、門前の野水、誰が爲に清かるべきかと思はれ、花の開落を共にせざるを悲しむは誰にて、月の盈虧を同じくせざるを恨みしは、何人ぞやなご思はれ申すに候。今し身は三千里外の客と相成り、雲樹杳として家信絶え、個中の消息を詳かにするを得ざるに候。嗚呼、實に戀しきは、故郷にて候よ。

愚痴くり返し、人に貫ひ泣強ふる様に聞え候はんも全く然る儀には之れなく、故郷と申せば、自我の區別なく、何となう戀しう相成り、御序の時分、云云との

筆に上し難き處に御座候。

木更津

日本武尊御東征の折颯風にあひ給ひ、龍妃橘姫を哭し給ひし舊地、時人乃ち地名を君不去と呼びしが木更津の出處さか。國の西海岸の一港邑にして、橘媛を祀れる吾妻神社もござ候地は吾妻の森。

東海だより

御書願はんとする小生に御座候。何卒この希望を容れ給はるべく候。

雲章披見。堂々たる一篇の故郷論、しかも流麗なる御筆致、僕をして容易に解せしめ、且つ同じく故郷を想はしめ申し候。文は申す迄もなく不得意、寫せばとて終に其片影だに髣髴せしめ難く候はんも、御意に背くも心苦し、只有の儘を筆執り申し候へば、語に美妙のもの之れなく、隨うて故郷の山川を紙上に見はし、君をして其境に逍遙せしむるの感、終に有らしめざるべく候も、幾重にも御察し願はしく候。

さても、僕が故郷は平戸と申す小島にて御座候。位置

○ 風流



大多喜より

此處、夷隅郡に於ける百貨の焼點、夷隅川に産する鯉は、その鱗紫金、美味さて古來名高く候。

○ 城址は市街の西、山河襟帯の地に存し居り候。もと鎌倉第四世將軍頼經の再築に係り、戰國時代には正木大膳此に據り、

○ 風流

は九州の西北端、陸を距る僅かに二十餘町、呼ば、應へん一渡、遊ぎてもと思はる、處に候も、潮の進退する毎に、奔流川より急にして、北に出づれば有名なる雷ヶ瀬戸、南に向へば九十九島の勝とて、大小の島嶼星散碁布、松島の景にも勝るに候。此處をば過ぎ、やがて東の海峽に入れば、彼の佐世保軍港に達すべく候。

二十餘町の渡をば、田平の渡と申すに候。九州地の村の名に取りしに候。先づ旅の人ならば、笠を背に着けて仰ぎ見よ、急潮隔てし島の北端に、一堆の丘陵、松戴きて濃翠滴らんとするは、舊城址に之れ有り、市街は其西麓にして、約一千戸。舊士族は何れも、町の南より西を

天正の末には、本多忠勝居り、爾後幾多の變遷を経、大河内氏の世に廢せられしに候。舟子八幡社は境内幽雅にござ候。

勝浦より

此處、戸數四百餘、商漁相半ばする港邑に之れ有り、もと植村氏の城下に候。古城址は勝浦崎に存す天正年間正木左近太

○ 風流

遶りて北まで屋敷構へしにて、是も亦約一千軒。今日は其十が一をも舊面目留めざる儀と存じ候。北に出づれば例の雷ヶ瀬戸、潮流四方より湊合し、相戦うて百雷の聲を成し、島の全土を震はしむるの感之れ有るに候。此附近暗礁多く、汽船往々にし坐礁致し、極めて危険の處に御座候。瀬戸の南、平戸町よりすれば北に小島あり、ク

ロク島と申すに候。本字は知らず、幼少の折城下を辭し候て、田舎に移りし故に御座候。瀬戸を東に向へば、北は碧波蒼茫として遠く天を蘸し眼に入るものは、只一二の白帆のみに候が、對岸は新領土の朝鮮に之れ有り、中間には壹岐と對島との二國、萬



東海だより

夫の據りし所。櫛濱と稱せらるゝは、灣内一面の海濱に之れ有り、灣の盡頭は丘陵起伏、山海絶好の地にござ候。

東金より

酒井氏の舊城邑。八鶴湖の蓮花は名高く候。本漸寺、西福寺亦訪ふべきの名刹。湖の名は、字の八津に因めるものに候。

詩人星巖は、東金城外一西湖と吟ぜしに候。山武郡中第一の都會に候。

千葉より

千葉縣の治所に之れ有り、四通八達之地陸には汽車、海には汽船ゆききし、頗る便利に候。市街の内外には、名刹巨祠散在す。中にも千葉寺は、阪東三十三所靈

東海だより

○風流

百二十六

古流れずに浮ぶに候。進みし右手は即ち九州地の西北端にして、田平の渡よりすれば少し東に戻りての北端に當るに候が、此に牛ヶ首、鹽俵など申す絶壁あり、何れも觀るべきものに候。矢張是も平戸の部、筆他にすべりしには非ず。附近には千本松などの景もござ候。

更に眼を南に轉じもせば、島より突出せる岬角を見るべく、此處も絶壁にして古松の高きは天を支へ、低れしは海に俯す。景は悪しからず候も、難所崎と申され居るは、船人を戒しめたる語にや候はん。尙も南に進みて得べきは千里ヶ濱、彼の鄭成功の碑ある處、有名なる歴史を有する地に候も、一廉の學者にして此處知らぬ人も少

なからず候、地は島の横腹とも申すべく、河内部落に屬し居り、陸地と相對し居り候へば、東の海濱に當るに候。此處打ち續ける砂白く、晴雪真に千里。能く檢すれば金色せる砂まじり居り、更に妙。東南には例の九十九島、青松を戴きに海上に點在し、景色もとより凡ならず、況や鄭成功の古蹟を以てするをやに候。

平戸は松浦伯爵の舊城邑、祿高六萬餘石、市街は繁華ならず候も、郡衙や裁判所や中學校等之れ有り候へば、辛うじて舊面目保ち居る由。此よしとは、僕も久しく故郷に背き、近況知らざれば俗に申すげなどの語を用ゐしに候。町内には酒造家割合に多く、隨うて飲助も多きわ

○風流

百二十七



東海だより

場の一にして、櫻花に富むに候。

### 佐倉

堀田氏の舊城下、戸數一千四百餘、國內屈指の都邑。兵營は舊城址に之れ有り、將門町の山上には將門が城址ござ候。

### 宗吾靈堂

此處、義民木内宗吾の埋葬地、印旛郡の

○風流

百二十八

けに候も、近き田助港の遊女屋と共に、人に語るは餘り好ましからぬ事に御座候。

城下より移住せし地は、ずつと南に方り、古田と申す處、固より田舎なれども山には岩谷の瀧、海には津和浦とて絶壁に名を得たるが之れ有り、山上には夫婦石と申す巨岩あり。大小の二尖岩相並びて立ち、遠く相望むを得べく、明月その邊へ掛るさまは、又格別の眺めに御座候。絶壁の下には、女鍋男鍋と申す深淵、此方には竹子島、相對する磯には帆掛岩、何れも觀るべく、中にも津和浦は、筆さへ執る人之れ有らば、一大記勝文出來申すべく候。

島の形は、ナメクジの這ひしに似、南北に長く候。北端に接しては大島、渡島、生月島あり。何れも無盡の富を扣へし漁場、中にも生月は捕鯨にて名高く、且つ拳大の小島にして水芳冽、酒造家も之れ有り、頗る飲むべく醇を産するに候。今日も、尙然るべく存じ候。

港は論ずるに足らず候も、薄香灣は水深く、一時軍港に擬せられし事も之れ有り候。只他に誇るべき事は、外國貿易の元祖地たる事にて、今にも其遺跡残り居り候。曾て先輩菅沼貞風、日本商業史を著し、その附録として平戸貿易史あり、御手に入らば御覽成され度候。近くは大阪朝日新聞社記者久保田小塊の筆あり、こは既に御覽

### 成田不動

成田不動の名は、九

東海だより

○風流

百二十九



州のはて迄も知れわたり居るに候。その堂宇の壯麗實に筆に盡し難く候。此處こそ、繪葉書に代理致させ申し候。

花島山

北總第一の勝地と申されて名高く、印旛沼の水際に屹立する一丘陵にござ候。山上に立てば、富士も筑波、成田山、將

の事と存じ候。其記にも見えし如く、寺院は宏壯のもの多く、半ば廢壞のもの之れ有り候も、耶蘇信者即ち國で申す黒宗のみは、今に至りて益勢力範圍を擴め、荒蕪地は何れも彼等の手に開托せられ居る由、人々が何の彼のと申す中に、排斥しつゝある耶蘇教徒の平戸と相成るべく、と存じ居り候。

山は安満岳、志々伎山。志々伎山には縣社鎮し、山上には望樓ござ候。地は直に支那海を双眸にすべく、水天相接し一物遮らず、雄大なる景に候。遙か東南には、彼の佐世保港有るに候。

以上は筆に任せて記せるもの、御推讀願はしく候。君

門山いづれも手に取るべく、夕陽うつる湖上の白帆、うち繞る山の十六峰、悉く畫景に之れ有り、人をして出塵の想ひあらしめ申し候。

香取神宮

香取町に鎮座の大社神武天皇の十八年の創建に之れ有り、名蹟列舉にいまま之れなく、境内は遠近の

の御意に適ふ様、美文風の記に筆染め度存じ、故郷の影と申す題にて、幾日か腹稿中に候も、未だ一行半句も書くに至らず、責塞の様に御座候も、前記御覽に入れし次第、何卒御海容下され度候。不宣。

梅の頃遊學中の友へ

十七の春迎へて目出度、どの御書に接したる、眞に昨日の様に存せられ候に、世は早い哉やの梅日和、村も少しは賑やかに、東坡頭巾被りし風流人の姿は見難く候も、僕等書生は稍いさみ立ち、觀梅の催しなきにしもあらず候。梅に名高きは、隣村の梅林、六七分の花信との事に



東海だより

眺め凡ならず候。

銚子より

古より縮こ醬油に名あるの地、港口は岩礁多く候も、東海岸の一要津、戸数は五千に垂んこし、浜りては利根川の舟運これ有り、市街の繁華は、殆ど千葉を凌がんさ致し居るに候歩を附近にせば勝地多きに候。

○風流

百三十二

て、此次の日曜には参らばやと存じ居るに候。君いまさば、途上の聯句も興多く、花下に酌む事も賦する事も、大に賑はひ申すべく候も、弟ごも相手には思ひもよらぬ事、少し張合ひぬけ候も、美文は敵とするに足る山本君居られ候へば、是は心強く御座候。軒端の梅は、今し満開、鶯は今に尙來らず候も、庭は春色日々に深う成り申し候。此に巻き込みしは、即ち其一輪二輪、遙かに呈せるは、故郷の春、夢に上し給へと申すに候。敬白。

◎返信に曰く。正月は昨日の様に思ふは宜しかりしも小生こそ爾後御疎情、他意あるにも非ざれば、失禮御海容下され度候。只今は又、故國の春の影、圖らずも

古河より

土居氏の舊治所、鐵道開通以來、舊倍の繁華を來せしに候。町の西南には古河城址、賴政神社これ有り、宗願寺も名高き寺にござ候。

結城より

紬にて名高きは此處も水野氏の封邑に之れ有り、市街は東

東海だより

○風流

百三十三

机上にこぼれ申し候。花こそ一點二點なれ、引かる、情は限りなく、心は恍として御書齋に遊ぶやうなる心地致し候。聯句に興遣りし事は、小生とて今に尙忘れ難く、殊に俗事しげき都の人となりしより、一しほ村の貴さ知られ申し候。況して、梅林の昨今、夢に入り易く候。枕上に五十六字を得申し候。左に  
相思枕上忽ち開天  
恍落中流載鶴船  
探到梅花溪不盡  
看來夜色月斜懸  
無端春夢婆娑破  
何處鐘聲斷續傳  
勝景依稀猶在目  
白雲搖曳素燈前  
御一笑あれかし。



四二十町、南北殆ど一里半に亘り居り、人家一千三百餘、訪ふべき社寺多く候。

水海道より

絹川の東岸に位する名邑、水海道の名は、將門が偕都を警みし際、其處を京にし、此處を大津に擬せるものさか傳へられ居るに候。將門記に見え居る由。

觀梅に行かんさて

貴兄には昨今如何、相變らず御推敲に日も尙足らぬ御事と存じ候。そを御邪魔する様に御座候も、生等只今より春日村の梅林に遊ばん筈、斯る風流の催しに、詩にも酒にも御得意の君漏しては、相成らずと一統の評議、村端の茶屋にて休息の上、御出遊促し申し候。使者に立てしは此茶屋の子、乞ふが儘に伴させて同行の都合、御瓢はお持たせ下され候て宜しく、内證事する御心配も無用の事ごも、吳々も御越し成さるゝ様にと祈り、地藏が辻に御姿の見はるゝを待つ僕共にごさ候。日は少しおそく候

相馬偕都址

平將門、皇居に擬せし舊蹟にして、守谷町大字守谷に候。其規模頗る廣大、今は山林あり、田畝あり其主部とも見るべき地は、高陵にして四面險絶に候。

○

廣島山と申すは、桔梗ヶ原と申す高原の事にて候。松樹叢

東海だより

も高が知れし隣村、殊に今日は陰曆にて十三日、注文通りの月、梅林にて暮れ候とも厭ふまじく、寧ろよき景に逢ふべき乎とも存せられ候。とも角も御返事下され度、例の走り書の筆にて。草々。

◎返信に曰く。御察しの通り、小生は此頃大推敲、當世は如何にして暮すべき乎との問題捉へ、日夜苦心致し居り候て、大分頭も腐りし處、丁度よき御訪ひ、何處までも御伴仕るべく候。御遠慮なう、一步さきに立ち給ふべく、小生は伴さすべき瓢、腹すき居る由につき、酒屋の水飲ませんと一走り試み申し候。御跡追ふには、得意の自轉車にて致すべく、十分も経ば直に御



東海だより

生して、四もの眺め宜しく候。

水戸より

舊徳川氏の城下、名高き地に御座候。城址は、千波湖と那珂川とに前後を擁せられ居り、今に尙一部分の城樓存し居るに候。

公園は、日本三公園と申さるゝ程にて、

○風流

伴に加り申すべく、暫時の失禮御ゆるしあれ。

百三十六

二月の頃轉宅を報ず

殘寒料峭の候、益御清穆恭賀奉り候。客中動もすれば居を移し易く候處、昨日又しても表記の箇所へ萍跡を寄せ申し候。地は城外に近く候も、紅塵極めて稀に、蹄輪の響は藥にしたくも耳に入らず、苔深き庭には竹樹疎に中にも古梅の春信を傳ふるが之れ有り、羅浮の夢を着くるに宜しく候。殊に詩に長せる兄、是非御題詩欲しく候へば、近日中に御越し願はしく、薄寒を破るには壘詰の用意なきにも候はず、只相待ち居り候。草々。

林泉に富むば申すまでも之れ無く、弘道館の跡なご床しく候。東照宮、藤田東湖の墓、常磐神社、吉田神社等、歩を狂ぐるの價値これ有るに候。

筑波町より

常陸、下野、上野、武蔵、相模、安房、上總、下總の八ヶ國に抽きんで、海拔三千百八十尺、峰頭は

東海だより

○返信に曰く。移轉し易きは客居の常、只梅花ある庭園に逢ひしを喜ぶ小生、今日の御案内、最も嬉しく存じ候。但久しく執らぬ詩筆、とても句出でまじく候も必ず參堂、世外美人に對し、一醉願ふべく候。拜答。追て、東京よりの來人伴ふ筈、此友は君と同じく漢詩好にて、而も名手にて御相手十分と存じ候。

梅花を乞ふの書

垣一重隔て、の御隣、未だ拜芝を得ず候も、御境遇の床しさは、御庭の梅花にても知るに難からず候。丁度野生の書齋に接し居り候へば、朝に清香臭ぐも、夕に疎影に

○風流

百三十七



男體、女體の二に岐れ、遠望すれば何れよりしても、双鬟の形を變へぬに候。町は山の中腹にして、商店旅舎備はらざるはなきに候。山中には勝多く候も、亦日記にて逃げ申しおき候。

霞ヶ浦

魚鰐の利と風光の美に富むは此處、周回は湖中の一島、周回三里餘、二百有餘の部落を成し居り、島邊には眞珠をも産する別境にて候。

土浦

霞ヶ浦の西岸に位し醬油に名高く、市街の繁華は水月に亞ぐに候。もと土屋氏の舊城下、新治郡に屬するに候。

伴ふも、夜半の夢に入るゝに宜しく候も、もとは是れ他人の有、何となう不満足に思はれ、終に斯くも一枝願ひ奉らんと致すに候。窓より手さし伸べなば、折られまじきものにも之れなく候へど、如何に風流の事とは申せ、御庭園の春を盗むに忍びず、殊更らしくも此書呈せる次第に御座候。貧詩人の爲めに一枝折り給ふや、如何に。

◎返信に曰く。御芳名は疾く承知、御移居以來、好機有れかすと存じ居り候處、圖らずも雲章賜り有難く是も美人の媒介、詞壇の一佳話と申すべく候。折るは惜しからぬ事に候も、先以て御得意の近什御似し願はしく、梅花と交換するも亦風流に候はずや。

梅見に招かれし返事

◎來信に曰く。花の頃には必ずとの御一言信じ、年毎に御案内怠らず候も、未だ曾て御來遊の榮を得ず、不足に存ずるは僕のみにも候まじ、今年も亦七八分の春信、臨時停車場さへ出來申して候。近き所故、何日にもとの思召に候はんも、年に春は一度しかござなく候ぞ。但し又、地の俗なるが故、御詩興浮ばすと成され候か。これも宜しく候はんが、必ずとの御一言は、當世風の御挨拶にや、僕は今に至るまで正直に聞き居り候へば、見頃を失せず一書斯の如くに候。



東海だより

潮來

霞ヶ浦の東岸にして  
古來繁華の要津、花  
朝月夕の眺め宜しく  
候て、詞人の筆に上  
るの地、且つ古來竹  
枝の詞多く候。

鹿島神宮

鹿島町に鎮座の官幣  
大社、境内には七不  
思議をはじめ、勝蹟  
數知らず、根本寺も

○風流

今年こそ逃すまじと網張りし様なる尊書、今更作病も不  
手際に之れ有り申すべく、御受け致し候。此次の土曜日  
曜など申しおかば、又雨など降り出で候て、終に君と梅  
とに背く様に相成るべく候へば、明日早朝の電車に送ら  
れ申すべく候。何れ御地岡本の悪しからぬ事、花の淡紅  
なるも妨げなき事、酔ふに宜しき灘の銘酒の評などは、  
大阪灣の白帆眺めつゝ聞え上ぐべく候。拜復。

桃咲く小島の友へ

人を懐ふに宜しき春夜の雨、いと夢に上り易きは御地  
小島の桃花にござ候。陸距る僅かに數町、飛び渡られも

亦訪ふべきの精舎に  
御座候。

磯濱町より

一條の危燈を登り、  
國幣中社 大洗磯  
崎神社に詣で申し候  
すぐ下は荒磯、激浪  
岸に觸れて雷聲をた  
ゝかばし、奇岩も亦  
觀るべく候。齊昭公  
の歌碑あり。

那珂川の口に御殿山

東海だより

百四十

せん風情、而も仙凡隔つる一葦の水、尙更に床しく存せ  
られ申すに候。小暗き書燈の下に、何とはなしに眼閉づ  
れば、御島の朝夕の眺め髣髴として現出致し候。  
東雲の空白らむを待たで、島の鶏と村の鶏と鳴交はせ  
ば、此世は造化の筆にばかされて、評しがたなき景、や  
がて島の半面に朝日させば揺曳する絳霞、海天を蔽うて  
武陵の昔をも想はするに候。  
正午近うなれば、花曇の空眠るが如く、緩う吹く風水  
面に細鱗起し、沖の白帆は坐するが様に動かさず候。此方  
の堤に牛長う鳴けば、彼方の島より鶏長閑に時を告ぐ。  
桃花霞みて定かならねど、岸の松は青く、磯畑の菜花は

○風流

百四十一



東海だより

あり、磯濱より三十  
一町餘、湊町に屬す  
るに候。山と海との  
景に富み居り、大詩  
筆もがなと思はしめ  
申し候。

西山館

此處、水戸光圀公  
隱栖の遺蹟、屋は岩  
谷に架して牆壁を設  
けず、毫も庶人の居  
に異ならず、その人  
さ爲りを知られて、

○風流

百四十二

黄に、島の長者の粉壁は白う手に取られん許りに候。  
夕暮のさま描き出しもせば、村は暮れても島のみは暮  
れず、今まで霞みて定かならざりし桃花、夕日受けて最  
鮮明に、朝にも正午にも勝りし眺め、桃花偏宜夕陽、  
前とも歌はしく候。

斯様に、雨の書齋に坐して心に描きなごし、果ては終  
に筆執り申せる譯、定めて今年の桃花は美しう咲き、御  
島の隅から隅まで、繪のやうに飾り立てし事に候はん。  
僕は、ぶら／＼病氣の募りもせず、癒えも致さで穀潰し  
居り候。案の條、見頃との儀にも候は、御島の人とな  
り、半日にても此世忘れ度、云々と御返書願はしく候。

いさも床しく候。又  
中途に桃源橋ござ  
候。是も光圀公の架  
せられしもの、附近  
には桃花多く候。  
久昌寺は、光圀公の  
創建にて、開山は法  
華僧日忠にござ候。

磯原遠見所

地は一高丘、山海  
両ながら絶好の風景  
附近には十里上阪、  
大北川の口には天妃

東海だより

○風流

百四十三

◎返信に曰く。相も變らぬ御才筆、小島の桃も價値出  
で申し候。君には尙、病魔に苦しめられ給ふ由、少し  
は御氣よりには非ずや。島へ御散歩とは、少し可笑し  
な申し様にござ候も、令弟促して小舟浮け、退潮に乗  
じて吾が島へ寄せ給へ。桃は御推量に違はず今し亂れ  
咲き、方角にも迷はん風情にござ候。處かはれば品か  
はる喻のやうに、暫し御逗留にもならば、以前の御健  
康に復し申すべく候。賤しき草屋、垣は船板の古びし  
それ、貝殻つきし儘の風流さ、暖き春の日受けて光る  
は、貴き螺鈿細工に對する感なきに非ず、是非當分の  
中、吾が島の人となり給ひ、御保養祈り上げ候。



山、その北には二つ島、見るにも記するにも、仲々いそがしく、只一箋誠み申し候。

平潟より

小一千の市街、その多くは棧橋を架し、その上に屋を構うと申す奇観。絶壁透りて灣を成し、鷹岡、黒浦の洞門は一見の價値ござ候。

春の旅に誘はれし返事

◎來信に曰く。又しても、心落着き難き花候、詞兄には御興動き候はずや。春と申せば京都、花と申せば嵐山に限る様にて、世間狭き感じござ候も、幾年繰返しとも飽かぬ此旅、明日の休曜早朝より、京都の春訪はんとする小生共に候。客月は桃にも背かせられし詞兄櫻には義理立て給ふべく、敢て御出遊促し申し候。出發は、御附近の天満橋の南詰よりにて、第一發の電車の客とならん筈。本業よりも、遊ぶ事に忙はしき昨今、常には尻重きもの

東山だより

大津より

達阪を負ひ琵琶湖に臨み、陸には鐵道、湖には汽船これ有り東海、東山、北陸三道の要扼、しかも京都に於ける東方の關門にござ候。戸數約六千、滋賀縣の治所に之れ有り、歩兵第九聯隊の營所もござ

東山だより

の花の爲には極めて軽く、京都の春は御先に失禮致し、昨日の午後より参り、夕暮の花に酔うて歸りし次第、重ねてとは少々しつこく、此度は御伴致しかね候。ぬけがけ致せる様に御座候も、御ゆるし下され度候。

一寸其處の花見に

怪しき花曇にござ候も、こぼれも致さず候に付、只今より造幣局の花訪ひ、序に櫻宮にまで及ばし度候。雅俗を論ずれば、参らぬに如くもの之れなく候も、矢張是も世間づきあひ、散歩がてら一寸と思ひたちし譯、降らば岩國屋にでも駈けこみ申すべく候。勿々。



東山だより

候。名勝古蹟は、市街の附近に散在し、一日に能く探り盡すべくもあらず候。

○ 今日三井寺、即ち圓城寺、近松寺、大津宮舊蹟、唐崎の松聖田の浮御堂など尋ね歩き、まる一日を暮し申し候。筆に上りしは、山光波影、覺束なくも日記に收めおき候。

○ 風流

百四十六

○ 返信に曰く。今日は風もなく、塵も起たず、よき花見日和と存じ候も、仰せのやうに怪しき空、先刻より思案に耽り居しに、不圖接せし御書、降らば其時の事、兎も角も御伴仕るべく候。只今一寸、瓢の用意中、直に御宅へ伺ふべく候。拜復。

### 花の宴に招かれし返事

○ 來信に曰く。花見の筵とは、眞に名のみに御座候へども、謂はれを説かば昔の長者が紀念の櫻、此一事にても御詩料には不足なかるべく、明日の晩は月も圓く候間、何卒御越し下され度、雨にても待ち上げ居り候

○ 名木の爲め、雅筵張らせ給はんとや、實に御風流の御事傳へて詞壇の佳話と致さばやと存じ候。漢詩は、七八年前の僕にこそ、今日は俗了して筆さへ執らず、小首傾くるのみと存じ候も、背かには却て失禮。命の如く、晴雨に拘らず華堂の客と相成り申すべく、先は御受け迄。

### 郊遊に誘ふ

雀百まで踊忘れぬと申す喩のやうに、春の野に逍遙するは、その愉快小供の時にのみ限らず候。分けて吟材到處に滿つ此頃、心動きて止まぬも無理ならずと、自分に勝手なる小理窟こね、君も如何やと御誘ひ致し候。城外

○ 風流

百四十七

○ 今日、六萬石の舊膳所を通り、義仲寺さては栗津ヶ原を吊ひ、勢田の長橋をも越え申し候。又、石山寺へも登り、處々見物致し、草津へ宿り候。此處は、東海東山二道の岐るゝ所に御座候。

水口より

加藤氏二萬五千石の

東山だより



東山だより

舊城下、東海道の一驛、や、繁華に候も長東正家、石田三成居りし地に候。大岡寺境内には申村栗園墓、甲賀一揆神ごさ候。

牛ヶ淵は横田川の流域、天工鬼鑿の懸崖長さ五十間、幅十間急湍渦を成し、その水深二十二丈。慶長五年正家が家康を

○風流

は僕が筆待つまでもなく、空には雲雀鳴き、地には蝶舞ふのみならず、橋の柳は烟り、丘の花は霞み、見渡すには、酒旗ひらくと人招き申すべく、水村山郭、げに詩の領と存じ候。出遊は只今よりにて、何も彼も用意すみ、直に御越し下され度、先日嵐山の歸りに御預り致しおける瓢、御宅へ届けざりしは、今日の様な事待たん爲にて候ひしよ。

◎返信に曰く。御念入の尊翰、早くも柳外や花下に遊び廻る心地致され候。常ならば御伴辭すまじきを、昨日より風の神に襲はれて枕と仲善くする不風流、御笑ひ下され度候。但し、傾け過ぎし祟りには非ず候。

春山に登るに誘ふ

出遊の遠近に拘らず、何れ暮れねば歸らぬ春の日、さらばと、日和山へ登らんと思ひ立ち申し候。日は明後の休暇、一番鶏に村辭さばやと存じ候。御異存ならずば、令弟の學校御序に、一寸御返事願はしく候。

申す迄もなく、日和山は此界限にての名山、城址よりも寺よりも、千里の眺望が何よりの價値、殊に小學時代より馴染深き山に御座候。山上の人となりもせば、海となく陸となく、皆吾が双眸に入り來りて妙に、物の十年は確かに命延び申すべく。理由付にて御誘ひ致し候。

○風流

此に陥れて殺さんとし、事終に發覺せり。傳へられ居り候。

八幡

琵琶湖と溝渠相通じ商業の盛んなる近江第一とも申すべき地朝鮮人街道の一驛。八幡山は眺望に宜しく且つ秀次の城址も御座候。

永源寺より

東山だより



東山だより

禪宗臨濟派の名刹に之れ有り、當地は山水の勝に富み、紅葉の名所、文士の筆を載するもの多く候。橋の急流に架する、阪路の崎嶇たる、懸崖の危き、樓閣の縹渺たる、盡も音ならぬ趣ごさ候。

多賀神社

古來の名祠、社格は官幣中社、石の鳥

居は高宮に建てられ本社まで約三十町ござ候。社地は高燥にして、老樹茂れる中に本殿、拜殿等並び立ち、攝社末社は數知らず。うたゝ神々しきに候。

高宮より

此處は中山道の一驛近江鐵道開通以來交通殊に便に、高宮布は名高く候。又、市

東山だより

○風流

百五十

◎返信に曰く。六里の往復、山路は僅かに四里足らず春の永き日、何の苦もなき事と、御同意して共に山上の人と相成り申すべく候。千里馳眺の實擧ぐるには、秋晴に如かざるべく候も、此頃は又此頃の景、優しくも相當の詩文の料に供され候はんと存じ候。少々迂回に候も、宅御尋ね下され間敷や、鶏よりさきに輕装すまし、御越し待ち受け居る筈に御座候。

郷友の信に答ふ

◎來信に曰く。昨今如何、申す迄もなく酌むと賦するどに、日も尙足り給はぬ御風流の事のみと、遠き此處

より存じ上げ居り候。時には、東山の春は如何に、嵐山の花は如何に、何處は如何に、彼處は如何にどの御書、賜りても悪しかる間敷と、田舎に住む淋しさの餘りに、思はぬものに非ず候。村の此頃は、矢張昔のやうに花も咲き、鳥も鳴き候て、常には肥桶擔ぐ、田吾作なごも櫻狩催し、割合には賑やかに御座候も、文事と問ひ給は、只の一句さへ吐くものあらず、不風流此上もなく候。生は相變らず、作文も作詩も熱心に續け居り候へば、例令進まずとも後へは戻らぬ心得にござ候。御序の時分には、どうぞ、京の春御聞かせ願はしく候。右御見舞かたぐ、一翰呈し候。

○風流

百五十一



東山たより

内に高宮城址あり、  
佐々木氏の世、高宮  
三河守の據りしもの  
に御座候。

彦根より

井伊公三十五萬石の  
舊城下、教育と商業  
甚だ盛んに候。地は  
芹川の下流に沿ひ、  
琵琶湖の支湖に臨み  
東北には佐和山を負  
ふに候。公園は一勝  
區、殊更に歩を致し

ても、その價値は十  
分にごさ候。

望湖亭にて

中山道の要路、磨滅  
嶺の絶頂に在るの一  
亭、見渡せば竹生多  
景の二島は、水烟模  
糊の間に隠見し、處  
々の帆影亦取るべく  
湖岸の部落、一々目  
に入るに候。書生感  
激の話は、今更の事  
に候はん。

東山たより

○風流

成る程、此處なる京都は錦繪歎くやうなる春色、見ても  
見飽かぬ昨今にごさ候も、酒や詩さては花月に心とられ  
て、久しく御不沙汰致せし譯に之れなく、今に筆執る事  
に不得手の僕、殊に無性者と國元にて君方より肩書貰ひ  
候やうに、今以てそれが去らず、花は何處にも咲くもの  
よ、鳥は何處にも鳴くものよと思ひ、昨今のやうす聞え  
上げざりしに候。如何に、如何にと疊みかけられし末、  
今更らしう筆執るは相濟まぬ様にござ候も、聊か御返事  
に代へ申すべく候。

京都の名所古蹟、さては四時の景物は、土地の人の眺  
めはやすより、他所より遊ぶ人の爲に賞せらるゝもの多

く候。僕とて他國のものに候も、既に寄留したる上、一  
應名所何かは訪ひし今日、先づ準京都人とも申すべきか  
と存じ候。隨うて、春が又かと思ふ位、外より思ふに比  
すれば、大變な相違かと存じ候。さて先づ御所のさまは  
と申すと。

廣きく芝生、處々に花空しく咲きて宮鶯徒らに鳴き  
東風寂寞として芳草離々たり。御苑域は、東は寺町通を  
限り、西は烏丸通に至るに候。南は丸太町に接し、北に  
今出川を帶ぶに候。面積無慮二十五萬坪、古は諸親王家  
攝家の邸第、多く廓の内在りし由に候も、明治の遷都  
と共に全く廢り、憐れ今日の淋しさになりしに候。南端

○風流



東山だより

藤樹書院

近江聖人ご申されし  
中江先生の遺跡、高  
島郡青柳村大字上  
小川に候。没せしは  
慶安元年八月二十五  
日年四十一。

竹生島より

周回十九町餘の小  
島高處は六十尺許  
四面峭壁にして水深  
く東方に小灣あり。

○風流

百五十四

の西に主殿寮あり、附近は喬木天を摩し、晝も尙五位鶯  
鳴き、池には春水昔のまゝに湛うて細波暖かに、橋に立  
てば人影は鏡中に碎くるかと存せらるゝに候。此處、も  
と九條家の庭園なりしとの事に御座候。  
東方には樹木蒼蔚として静かに、中に仙洞御所、北に  
接しては大宮御所ござ候。南には梨木神社、博覽會場、  
測候所等ござ候。又、彼方に翠をしたゝらす銀杏あれば  
此方には雲宿す老松聳え、見るからに轉床しく候。○車返  
の櫻と呼ぶるゝは、曾て 天覽を辱うせる名木の由  
にて、年記しがたき老樹の封土に護せられ、花は雪より  
も白う、亂れに亂れ咲、いと貴く見られ申し候。

僅かに舟を容る。磴  
を登ること數十級  
大神宮寺、都久夫須  
摩神社これ有り、四  
望の景凡ならず、眞  
に仙島に候。竹生村  
の早崎より五十町。

岐阜より

美濃第一の都會、團  
扇、岐阜提灯、柿羊  
羹、長良川の鮎は名  
高く、街衢は井然と  
して亦廣く候。もこ

東山だより

○風流

百五十五

楓震即ち紫宸殿は、御苑の約中央にして西に偏す、堺  
町御門より遙かに望めば、春霞縹緲たる中に、瓊樓玉閣  
參差として隠見するに候。近づき仰げば、四面に石垣を  
遶らし、南門をば正門とし、別に唐門、日御門、公家門  
朔平門等ござ候。その聞く様に候は、紫宸殿は門内に  
更に宮垣を遶らし候て、承明門、日華門、月華門等より  
御階に通ずるとの事に御座候。清涼殿や清所、常御殿、  
一の對屋、二の對屋、内侍所、女院御殿、記録所、小御  
所、御學問所、御休所などの宮殿、紫雲深き處に相連な  
り、何れも畏からざるはなき由に御座候。  
東山へは未だ今年の杖曳き申さず、嵐山へは五六日前



東山だより

井の口と稱し、齋藤氏の居りし地に候。

○ 稻荷山は、一名を金

華山又は破鏡山と

申され、岐阜市の東

に聳え、東北は長良

川に臨み、懸崖をめぐらして要害無比、

其絶頂には城址之れ

有り候。眺めは、附

近の山は云ふ迄もな

く、白山、駒ヶ岳、

伊吹山、南は知多浦

の烟波をも望まると

に候。登るには、七

曲口、百曲口の二ヶ

處よりするに候。

○ 公園は、俗に千疊敷

と申され、昔城主

の居館の跡に候。園

中には萬松館、物品

陳列場、名和昆蟲

研究所等ござ候。

大垣より

戸田氏の舊城下、そ

東山だより

○ 風 流

百五十六

一遊試み申し候。松の樹間に花白う雪漲らす、谷に峰に

香雲の棚引く、昔ながらの春景色に候。只年毎に交通の

便開け候故、四方よりの遊客多く、繁華限りなく候て、

川には畫舫の往來頻りに、絲竹の音も湧くやうに候。陸

には、相携ふる夫妻さては孫の手引く老人。折には自動

車に砂ぼこり揚げさせ、走せ來る人さへ之れ有り、不風

流も亦甚しく、花下に禪をさらすよう憎く候。

花の山、二丁登ればの句碑に案内致され、大悲閣へも

登り候。小さき禪扉の床しく、京の市街を遙かに見渡す

など、初めて來し人には案外の眺めに候はん。此には、

舟にて山下に來るも宜しく、渡月橋渡りて東側の山裾辿

り、花仰ぎつ、水に俯しつ、碑の下に來るも宜しきに

候。彼の鑛泉場は、大悲閣の下に之れ有り、他にも飯酒

するに適當の旗亭、三四軒ござ候。

以上は、極めて詩趣に乏しき御通信、委曲は別便に付

しおける文藝雜誌にて御承知下され度、京都の春と申す

題の下に、一生懸命の筆揮ひおきしもの、録され居り候

間、御覽煩し候。草々。

舟遊に誘ふ

誘ふ事の競争する様にござ候も、明日午後より舟にての

花見、二三の學友と約結び申し候。都みたやうに、紅提

○ 風 流



東山だより

の繁華岐阜に亞ぐに候。地は中山道、尾張、伊勢路の要衝、揖斐川よりしては桑名に舟便あり。今に尙城址存す。禪桂寺内には、江馬細香墓ござ候。

養老公園

養老瀑によりて名を得し公園、園中は樹茂り蒼青く、見るべきものは飛泉を第

○風流

百五十八

灯吊しせる、美しき舟は手に入らず候も、琴樽と御同様が乗るには不足なき、新造のもの特に借りおき候。同じ春に候も、野山よりも入江の遊は亦異なりし興動き申すべく、柳の烟霽る、朝より、花の霞む夕まで、鷗の仲間入して觴詠を縦に致し度、僕より御意伺ひ候。  
◎返信に曰く。舟ならば丁度都合よろしく、尻に帆掛けて賛成致し候。お伴するより、外に申し上ぐる事は之れなく候も、船頭如何。小さき御腕に命預くるは心細く、此點は何か御思案願はしく、固より花曇の此頃、荒東風吹けばとて、支那まで流されも致すまじきも、念の爲め聞え上げおき候。

餞春の筵に招く

一さし、菊水天神社御嶽神社、妙見堂、不動堂、白山権現等これ有り、自然の景致に富み居り候。地は高田町より三十町餘に候。

關原

此處、彼の慶長庚子の大戦場、關原驛の近傍なる大原野の稱にして、東西一里南北十四町、今に尙

東山だより

○風流

百五十九

吾々を樂しませし春、漸う老いて花も稀に相成り、世は何となう夏近く、鶯の聲も葉隠に聞ゆる昨今に候處、せめて一夕の吟筵張り、將に去らんとする東皇に餞し、梅以來、とりぐの花に逢ひし恩恵に謝したく候。敝宅は幸にも江畔、飽くまで酌みて徂春を送り申すべく、何卒山紫水明の頃より、御越し待ち奉り候。拜具。  
◎返信に曰く。三春眞に一夢、せめて詩酒もて青帝送らんと、御宴、詩人の面目是等に發揮せではと、至極御同意、命のやうに夕刻より參上仕るべく、例の苦吟



東山だより

形勝依然、之を汽車中より見るも、東西二軍攻守の形勢、容易く心に描かるゝにて、將士の墓も之れ有るに候。

○ 關原村には、關原川不破關址、桃配野上の里等の舊蹟、これ有り、細かに探らば、筆いそがはしき地に之れ有り候。今は只名のみ記し候。

○ 風流

は杯手にしながら、御樓の欄に倚りてと。拜復。

百六十

初夏の請に答ふ

◎ 來信に曰く。綠陰幽草實に詩家の好時節、昨日まで花に酔ひし處、薰風吹き度りて衣襟清く、紅塵さへ犯し得ず候。明日は例の吟會、君來ずば白戰激しかるまじく、席を空しうして相待ち申し居り候。

花時には屢酔ひし高堂、その酒さへ未だ醒めぬ僕、又しても御案内受け、恐入り申し候。酌む事は春に取越しおき候ひし故、水よりも清き新陰に殘醉洗ひ申すべく午後早々詩筆携へ伺ふべく候。

太田より

太田は東濃の名邑、渡はたかし、木曾の棧橋、太田の渡と諸はれし險所、今は平水さ大水さに要する二條の鐵線を架け、急流を利用して造作もなく渡らるゝに候

永保寺

西國巡禮第三十一番の札所、國中無双の

東山だより

海村避暑の友へ

町の此頃の熱は九十五六度、極めて凌ぎ難く、扇風器の送る風は、沸きし湯より暑く感せられ、松風や波の音や轉戀しう相成り申し候。如何に暑ければとて、鎔けも焦れもせぬが妙と、今日の眞晝も父と噂したる可笑しさ、町は實際苦しく候。毎度の御手紙に、田舎なれども都人士の避暑少なく、水は清くして芥一つ浮ばず、彼方に島あれば、此方には松原一の字形に横はり、夕立の眺めよしとの事、目に見るやうに存せられ候。何れ砂は雪欺くばかりに白く、夕の御散歩は此處等にて試み給ふべく、

○ 風流

百六十一



東山だより

靈境にして、又東濃第一の勝區、堂宇の莊嚴さ、山水の秀麗さ相待つの地、遊ぶには春秋共に宜しく多治見驛よりは十餘町にござ候。

中津川より

中山道の一驛、信美二國に對する彼我百貨の集散場、木曾川を越えては、飛驒に入るべく、進ま

○風流

百六十二

句思ひ出で、は杖立てさせらるゝ事まで、心に描かれ申すに候。温泉旅行の友よりは、相變らぬ自慢の筆、自由自在に有る事無い事、思はせぶり可笑しく候。瀑巡の旅せる友等よりは、此頃は一向に便これなく、行き疲れて何處かの宿にて滞在かと思はれ申し候。御地が、西宮か須磨か、せめて淡輪あたりに候は、一度御邪魔せんと存じ候も、近しと申しても船にてする淡路、思ふのみにて果し難く候へば、幾度も、羨まがらせに限らず、涼しき御筆願はしく、待ちに待つ僕に御座候。尙、今日小包にて差立ておける一罐は、熊本の名産鷹の爪、つまらぬ物には候へども、友より土産として貰ひし品、當時

ば木曾路に候。惠那山には、中津川よりすべく、登行約五里。路に二條あり山開は六月に候。

落合より

地は一凹處、湯船澤川と釜澤川と落合所にして、架するに落合橋ござ候。橋渡れば木曾路、右して湯船澤川に添へば上下七里の御阪嶺に候

東山だより

は美事とほめしもの、そをつまらぬ物なご申し、君に嫁入すは如何はしく候も、珍しき味と思ひし故にて候。試み給ふとき、品は何と相判り申すべく、由來は聞きもらし申し候。草々。

◎返信に曰く。御變りなき由、結構に存じ候。御意あらずとも、涼しき事など聞え上げ、御消夏の料に供し度候も、悲しき事には筆自由にまかせず、さればとて御惠贈下されし鷹の爪の如、小包にて呈せられもせず矢張手紙にて附近の勝ども御便致し、十中の七八迄は御推察にまかする事に致し候。

朝は極めて心地よく、蚊帳の裾を潮風に吹き動かさ

○風流

百六十三



東山だより

高山より

飛驒唯一の都會、山水より神祠佛閣のさま迄、京都に似通ふより、小京華さの稱も御座候。永祿年中金森氏移封後、幕府の直轄なりし地。

材木石

この石も亦飛州の一奇觀。六角、三角、八角と一定させるの

多く、其形全く材木に異ならず候。地は老樹茂りて天を見ず幽絶にして路險に候も、奇を訪ふの文士多く候。

中山七里

山迎へ水送るの状、恰も横披に對するが如きの地、之を下原より下呂に至る、道程七里間の稱に之れ有り、高山町に通

東山だより

○風流

百六十四

せ、尙見殘しの夢續かせんなど思ひ、寢反もせずして眼を閉づる横着さ、店預る頃にも候は、たしかに御眼玉頂戴する價值十分にて候。

游泳するは、月の夜も宜しく候も、眞晝の岩陰にて行るも宜しく候も、東雲ごきに如くもの非ず候。こを實行するには、見殘しの夢を思ひきり、海邊も松原近う歩運ばねばならず候、海霧散するの時、太陽迎へて浴するが宜しく候。松と云ふ松の葉には、露びかくと、水晶を宿すに異ならず候。

午睡して目覺悪しき時は、松原に歩するこそ、何よりも宜しく候。微風渡れば小琴の曲をなし、稍強う吹

き候へば、波の音を成し、眞の波の音よりも涼しく候て、心も清々しう拍子宜しき時は、絶句一首二首出来る事もござ候。松原の散歩は午睡後に限らず、夕立はれて虹たちし時も、夕日暹る頃も、月の夜にも悪しからず、殊に只一人徘徊するが詩思ふに宜しく候。

暑き日の夕立は、此處にても矢張千金の價これ有り身は蘇生したる如く感じ候。降る時に松原黒うなりて隠る、霽れて後島の近う見ゆる、後の山の中腹には尙雷雨する、自然の活文章とも申すべく候。沖行く白帆に、夕日照りて明かなる、眞に筆にも上しがたき眺め、君ならば直に繪に入れ給ふべく候。

○風流

百六十五



東山だより

する縣道にござ候。右は益田川の急流、左は絶壁、行人は累々たる石卵を戴き、濼々たる水聲を踏み過ぐるに候。

小阪より

御嶽登山途中の町入口の朝六橋は、枕の草紙にも見え名高く、その側の景も凡ならず候。橋名の起れるは、その日暮

○風流

百六十六

雨の夜は、何とはなしに心細く、難船せし人の死なごを思へば、海邊はいやに相成り候も、波音静かなる夜半、櫓のひびきに驚かされて起つ水禽の羽ばたき、拍々として枕に落つる、又なく詩的に御座候。沖に隠見する漁火、此に限りし事に之れなく候も、仲々に憐れ深く候。而も御惠贈の鷹の爪、かじり乍ら詩に耽るは、斯る雨の夜ぞ宜しからんと存じ候。

一つ書き二つ書き、順序もなう書き列ね、何の趣味も涼しげも、文字の上に見はれ居るまじきも、それは最初よりの御約束、上手に御讀み願はしく、只御暇の潰る、事、御氣の毒に存じ候。拜酬。

箕面觀瀑に誘はれし返事

の眺め曉景に似る故との事に候。

御阪嶺

神御阪さも申し、往昔日本武尊の越え給えし官道、上下約七里、飯田新道と申すも、山中は開け居らず候。彼の園原と申す葎木の名所は駒場に下るさの里にあるに候。上るさの湯船澤には、兼好法

東山だより

○風流

百六十七

◎來信に曰く。今年は運悪く、避暑中の留守番役申しつかり、不平の心手傳うて一しは暑く、今日などは最も凌ぎ難く、氷の山へ逃げたき程の思ひ致し候。明日久し振にて交替の休日、早朝より箕面へ行かばやと存じ候。濱寺へとも思ひ候も、少しにても木立しげき處涼しかるべしと、海をすて山へ志せる譯、貴兄は不平黨の御一人にも有るまじく候も、一日町逃れ出で給うては如何に。青楓さらく、昨夜の露こぼす下に辿り到らば、思はず首縮めんなど、遊ばぬ前より様々の



東山たより

師の舊蹟ござ候。

木曾路より

馬籠より贊川まで、約二十二里間の稱にて、景色を撫するの士は、舊道こそぞ存じ候。山中には、良材の多き本邦第一、その大部分は帝室の御所有に候。

駒ヶ岳は直立七千八百尺、行程四里八町

餘、上松よりすべく候。又、福島、宮の越よりもせられ候。

上松は中山道の一驛福島に亞ぐの繁華にこれ有り、東には駒ヶ嶽、西には木曾川あり、小野の瀧は高さ百尺、幅六尺、鐵道は此の上を通じ居るに候。

御岳は火山、海拔一

東山たより

○風流

百六十八

事思ひ、終に御誘引申し上げ候。斯様に申し候ても、萬一雨降らば是非なくも流れ申すべく候。

心を平氣にさへもてば、暑からずとの事に候も、切らば血の垂る人の身、矢張暑く思ふも當然かと、理窟を得れば益堪へ難く、氷含めばとて戴けばとて、容易に涼しさ覺えず、不足申し續けて今日も亦暮したるに候。御書は只今と申す九時に着、箕面への御遊、時節柄至極宜しく、瀑に對するよりも途中の溪如何に涼しかるべき、青楓よりする露、げに命の如しと存じ候。お伴すると致しても、晝以後ならざれば叶はず、御延し願はれまじくや草鞋穿きし昔ならば知らぬ事、今は往來便なる電車之れ

有り候へば、二時より参りても十分と存じ候。されど、暑き最中に瀑の前に立たんとなら、僕は後よりお跡慕ひ申すべく、御休憩は目に觸れやすき家に願ひ上げ候。

初秋故郷の友へ

暑しと不足申せるは昨日の夢、大阪の中央も大分涼しく相成り、疎々として梧桐に灑ぐ夕暮の雨、小庭の景色ながらも流石に秋、やがて晴るれば空澄み候て、斜に白う流る、一條の銀河、影は低れて四五軒先の樓に落つるに候。せめて今宵までと吊し置きし岐阜提灯、夏の夜に比べれば興少なく、風鈴の涼語るは何となう優しう、まだ

○風流

百六十九



東山だより

萬九百餘尺、信州よりするものは、王瀧口、黒澤口の二線ござ候。途中にも山中にも勝多きに候。

○ 木曾と申せば、何人も寢覺の床の名を知らぬものなき程の勝地、奇岩と急流と相待ち絶景を成し居るにござ候。鐵道は、此上を過ぐるが故、

窓よりも、その一斑を窺ひ得らるゝに候。臨川寺は、寢覺の床の東岸にして、庭より亂石急流のさまを俯瞰し得べく、竹林を穿たば、其處に達せらるゝに候。鐵道は寺の下を通するに候。

東山だより

名高き棧橋は、往昔の跡のみ存し、今のは長さ五十六間

○ 風 流

棄つべくも思はれず候。時に竹縁近う膳おき、晚酌めかして一つ酌めば、早くも蟲は歌ひ初め、思はぬ興に詩釣らんと、終に幾本かを傾け申し候。明日は日曜、萩見も宜しかるべく候も、年毎に俗になりゆく市の内外、僕が遊學せし明治二十一年頃は、南は天王寺、天下茶屋、北は萩寺附近、極めて散歩によりしも、今は人家建てつらなりて、訪ふべくもあらず、それより書齋の人と相成り、全一日を書中に暮すが遙かに勝れるにて候。さるにても、御地は如何に。山となく水となく、見るもの皆涼しく相成り、筆は彌御健かなるべしと存じ候。久々のおたより、由なき事まで郵に付して候。拜具。

○ 返信に曰く。御得意の筆、幾度くり返しても讀み飽き申さず、相逢ふよりも興多く候が、是もつまり美妙なる御文の徳、千里猶面談するがごとしとは、能くも申せる語と感服致し候。

さて、村は如何にと問はせ給ふ乎。申す迄もなく涼しく、田草取る時分に休憩せし椎の樹陰、葉は落ち候はねご、陰疎になりし心地せられ、その下に湧く清水は澄みに澄み、鏡よりも明かに人の影寫す可笑しさ。又、點々と樹根より滴るひゞき、耳にたちやすき此頃

に候よ。何も彼も、秋のしるしは見え申すに候。稻作は、近年稀なる上出來に之れ有り、何れも喜色

○ 風 流



東山だより

幅三間四尺の木橋。かけはしや命ごからむ蔦かづら。さ芭蕉翁のよみし危嶮はなきも、附近の山水固より尋常に非ず候。

福島は山中第一の繁華地、戸數約八百七十、木曾川の兩岸に市街を成すに候。昔時中原兼遠の居城地に之れ有り、義仲の起りし地に候。訪ふ

べきは長福寺、興禪寺、古城址、義仲墓等にて候。

宮越に來もせば、宮越城址、徳恩寺、宮越八幡、南宮神社ござ候。多くは義仲に縁故あるものに候。

藪原は、お六櫛に名高き地、鳥居嶺の南麓に之れ有り、飛驒

東山だより

○風流

百七十二

満面に見れ居り候も、豫期し難きは天候、小生は只々無事なれかしと是祈り居るに候。併し、こけても平年作以上は保證し得べく、高等小學校の新築、さては氏神社殿の造營、其他の村の事業のもの、一時に解決は覺束なかるべく候。

景色は、とても寫し難く候はんも、仲々に眺め宜しく、詩作る事知らぬ小生にても、繪に對する如き感じ多く候。昨日も濱路通り候に、秋迎へし柳は葉稍まばらに、夕暮に候ひしも烟こめ申さず、渚の蘆荻には西風戦ぎ、彼方の漁家よりは炊煙淡う騰るが目につき申し候。入江には、柔櫓のひびき冴えて聞え、岸さして

歸る舟一二艘、全くの繪にて御座候ひき。三日月は西山の一角に掛り、鎌ども評したく候ひき。此邊は、弟ごもに請はれ、夏の夜には螢追ひし處、今は暮れぬ先より露しとゞ、蟲さへ憐れに鳴き、踏むも惜しき心地致されしに候。

萩見として歩運ぶ事や、野の秋色を賞するは、村にて貴ばず候も、小舟に身預けて釣するは、君も御承知の通り是よりにて候。茸狩や栗や柿やは、ずつとの先に御座候も、雨毎に下る鮎は、相變らず美事なるものにて、殺生の一なれごも捕るは又面白く、此次には串焼のもの呈すべく候。右御返事に代へ申候。

○風流

百七十三



東山だより  
路分岐致し居り候。

鳥居嶺

中山道の一峻嶺、御岳神社の鳥居を建て其遙拜所とせしよりの名、古は木曾の御阪と云ひし由に候高き四千二百五十尺木曾、奈良井二川の分水嶺、路に新舊の二線ござ候。蕉翁の句に、雲雀より上に休らふ峠かな。

眞景に候。又、天正十年の古戦場に候。

鹽尻より

中山道の要驛、市街は阪を成し、次第に進めば嶺に候。舊道は左に、新道は右に開け、嶺の絶頂を通じ、富士を眺むるに宜しく、諏訪湖は脚下に鏡を開くに候。此處は、天文十七年の古戦場。且つ

東山だより

○風流

蟲贈られし禮

◎來信に曰く。此籠ながらの蟲、聊か御機嫌伺として奉呈致し候。先日より、一度御越しもやと、土曜なごは殊に御待ち致し候も、終に御姿見え、何に御不足懐かせらるゝ事かと迄疑はれ申すに候。此處、村とは申せ、隔てしは只橋一つ、朝夕の御散步、朝のを公園に遊ばし、夕のを此方に試み給は、蟲捕へ御伴すべきを、と小生より不足聞え上げたき程に御座候。先づ此一籠にて、村の秋偲び給へ。御書齋の電燈と、光輝の是非は知らず候も、此頃月は圓く候ぞ。

百七十四

蟲に托しての御不足、確かに能く聞え申し候。僕とて態と御不沙汰した譯にも之れ無く、近き其處の事に候へば直にと思ひしが失禮のはじまり、月明るくして野路照す夜は、草におく露の光きらりと、水晶の玉ちらせるに異ならぬ事も、とりどりの蟲面白く秋歌ふ事も、能く存じ居りて却つて訪ひ奉らず、今は只々恐入るより外はござなく候。御惠贈の蟲、昨夜は枕上におき、終夜御村の景を夢に上し、詩さへ二首得申し候。別紙に記せるが即ち其作、御覽願はしく候。何れ御わび旁、橋北に渡りて高居叩き申すべく、吳々も月の圓さの缺けぬ中、蟲聞の御伴願ふべく候。拜答。

○風流

百七十五



東山だより

明治天皇の御遺跡も  
之れ有るに候。

天龍峽

天龍川流域中の奇  
勝兩岸迫りて老松低  
れ中央は即ち奔湍  
且つ淵を成す。上に  
飛橋あり、姑射橋と  
申すに候。飯田の南  
二里許、上流より遠  
州に舟川下す人は、  
坐して此勝を見らる  
ゝに候。

○風流

月見に招く

百七十六

待ちつけし十五夜、而も今宵にて候。市外に構へし草閣  
花時は極めて不風流に御座候も、月見は大得意。東山に  
さし上る時の景は兎も角も、平楚を貫く大川に、金波碎  
くは又格別の眺めに之れ有り、南天へ高う轉じ、お寺の  
塔に掛るさま、僕が家ならずばと自慢致し度景に候。今  
宵の空は、少し怪しう候も、中秋は中秋、雨降らば無月  
を賦し申すべく、而も今古共に例ある題、とかく詩人は  
何の彼のと理窟つけ、酌みたがるものと思召し、是非玉  
趾枉げられ度、吳々も月の出に後れ給ふまじく候。

飯田より

飯田は堀氏二萬石の  
舊城下、信濃の最南  
を占め、三河遠江美  
濃に通ずるの要衝、  
鐵道知らぬ人も多か  
るべきも、仲々の繁  
華にごさ候。彼の有  
名なる太宰春臺は  
此處の人に候。

高遠より

此處、伊那街道甲州

東山だより

觀月の友へ返事

◎返信に曰く。今夜は如何にも名月、御催しは必定と  
當てにならぬ事を當てに致し居り候處、果して只今の  
尊翰、申す迄もなく、盛大なる雅筵に候はん。降つて  
も照つてもとの言、殊に詩人の面目躍如、流石は君よ  
と申したく候。無論、月の出の時刻に後れず、御書樓  
の人と相成るべく、先は御受け迄。拜答。

◎來信に曰く。詩社の會は、雨ならばとの條件の下に  
流れ候に付、嫦娥を弔ふべく、先刻より此處にて小酌  
催し居り候處、朝來の雨は忽ち晴れて月清う後れなが

○風流

百七十七



東山だより

路の要衝、もと内藤氏三萬三千石の城邑維新前の繁華は、伊那町に奪はれたるも尙往時を偲ぶに餘りざ候。城址は一丘陵天正年間には、仁科信盛悲壯の最期を遂げし所に候。又、町の入口に、鉾持の棧道ござ候。

上諏訪より

此處、諏訪氏の舊城

下、城址は湖畔に存す、もと高島城となり、花多く候。且つ温泉に名ある地。

諏訪神社は海内屈指の大社、上社は二座に分れ、上諏訪町の西南一里、中洲村の神宮寺、一は宮川村の小川原に鎮するに候。下社も亦二座に分れ、下諏訪町に鎮

東山だより

○風流

百七十八

ら中天に掛り候。水樓の眺め殊に宜しく、月仙子と對酌も興なし、御越し如何、御都合伺ひ上げ候。草々。御風流は兎も角もの事、油斷のならぬ雅兄方に候はずや月出でずば、何處迄も内證に酌まれし事かと存じ候。僕等も酌み居しに只今の空模様、急に舟遊おもひつき、殘肴携へ琴樽載せん筈。舟は夙に用意すみにて、是よりは棹執るのみと申す處。酌み給ふ銀水樓は、恰も對岸に候へば只今の御返事は舟より仕るべく候。樓にては興盡きたりとならば、御同乗苦しからず、狭くは膝立てゝなり重ねてなり、深更にまで秋弄し愉快に酌み申すべく、立ちながらの筆、御推讀下され度候。匆々不盡。

菊花を乞ふ

自慢も横着もならぬもの、病まぬと廣言せし僕、時も有らうに此菊日和の昨今、終に枕を相手にする身と相成り申し候。固より上等の肺や脳には之れなく候も、何とかなしの頭痛、是が脳病かは知らず候も、貧乏も大分手傳ひ致し居る模様、御笑ひ下さるべく候。それに、我儘は今に癒え申さず、君に乞ひ奉りたきは菊にて御座候。日來の御丹誠、折り賜はれとは理不盡に候はんも、詩友よりの儀と御勘辨、普通のもの一二枝此太郎へ御與へ願はしく候。筆はまだ自由に候故、何なりとも賦し出で、御

○風流

百七十九



東山だより

す。上下の二社相距る、二里以上に候。

○

諏訪湖は、一に鷺湖と稱せられ、周回四里二十餘町、尾尻は天龍川の水源を成すに候。氷すべりと富士の倒影は名高く、衣ヶ崎より之を望む殊に宜しく候。

長野より

昔は善光寺村と呼ば

れし僻土なりしも、

今は戸數五千三百餘の大市、善光寺を第一に、訪ふべき勝蹟多く候。序に川中島をも申ひ申し候。

松本より

戸田氏六萬石の舊城下、天守閣今に尙存し居るに候。市の内外、且つ程遠からぬ地には、名勝古跡多く、淺間温泉も之

東山だより

○風流

禮に代へ申すべく候。

○返信に曰く。御二日酔の御洒落に候はずや、若し然うで無くは、精々御養生在らせらるべく候。御望の菊は、何よりも容易なる御用、よき物と思ふもの四五本御左右に呈し候間、十分に御目娛しましめ給ふべく、もと御風流の雅兄に候へば、醫藥よりも効有るべき乎と存じ候。中にも白きは僕が自慢の花、能く御覽願はしく、只先年のやうに、人格憊ばるゝなごとの御禮は只今より御斷り致しおき候。但し、漢詩は是等も趣向の一にて、已むべくんは差支これなく、御名作參らん日のみ、今日より相待ち居り申すに候。草々。

百八十

### 池田の友へ返事

◎來信に曰く。一時間餘潰せば、容易に相見らるゝ御地と此處、ごちらが尻重きかは存じ候はねど、今に一度も來給はぬ事思へば、君こそ重き方かと存じ候。曾ては初鮎の頃に御案内致し、夏は寶塚より武田尾に掛け、温泉へ御伴すべしと申し上げしも、是も卻け給ひしに候はずや。箕面は夏も宜しく候も、眞面目は秋の紅葉、今し其は見頃となりしに候。昔は境幽にして、瀑の下には仲々物凄くて容易に到り難かりしと、父共は物語り候も、今は其さままだに留め申さず、電燈は樹

○風流

百八十一



東山だより

れ有り、旅愁を慰むるに宜しく候。

姨捨驛より

此處は、只山腹に設けられし鐵道驛舎一月。眺めは申す迄も宜しく、例の四十八枚の田も眼下にござ候て、善光寺平を隔て、は、鏡臺山に對し、松代地方をも眼に入れらるゝに候。松本より篠井線

○風流

百八十二

間となく、溪上となく、到る處に點せられ居り、夜の十二時にても訪ひ易き地と相成り居り候。寺樓の白雲紅葉の間に起るさま、瀑の絶壁劈いて下るさま、溪水の水晶碎きて流るゝさま、落楓の風に錦のきれ散るさま、とても小生の筆には上し難く、是等は是非御遊促し、御詩毫借らでは相成らず候。殊に曲折たる小徑の水に沿へる、重疊したる峰巒の行手に盡きざる、興も亦盡きやらず候。見頃は、花のやうに命短く候はざれど、一夜の嵐に逢は、荒涼たる山と相成り申すべければ、必ず一兩日の中にくそ。往くさに、一寸御立寄り下され候は、直に御案内致すべく、池田迄は少

にてすれば、此處を通るに候。

高崎より

繁華は前橋に劣るも商業の活潑なるは其上に出で居り候。も松平氏八萬二千石の城邑、地は所謂四通八達、何れに行くも自由な候。市内又は附近には、筆携へて遊ぶに宜しき地少なからざるに候。

東山だより

○風流

百八十三

少の寄路に過ぎ申さず候。追て御承知かは知らず候も酒飯するは不足なき旗亭ござ候間、何も御用意に及び申さず、常に御使用の澤の鶴は、壇詰のもの幾本も供へられ居り申し候。不宣。御不沙汰は申し上げやうなく、御筆の達者なる事には閉口致し、叙景の點は感服致し候。温泉は、此後も宜しく候はんも、御示しの紅葉見逃さば、更に一年待つ事に相成るべく候へば、此次の日曜に奮發、瀑の前に御案内願ふべく候。碧溪紅葉、さては白雲の景、僕が筆こそ一しほ寫し得べくも非ず候も、遊びし紀念としては、勉めて日記に其影留めおき申すべく、實地は果して如何なるべ